

ご存じですか？ こんな文化財⑦

(北海道)

札幌「時計台」 五稜郭跡

重要文化財

特別史跡

道都札幌の象徴「時計台」

道都札幌の顔の一つとして知られる時計台すなわち旧札幌農学校演武場は、明治十一年（一八七八）に竣工した木造二階建ての北海道における初期米国風木造建築で、基本設計は、当時農学校教頭であったウィリアム・ホイラー教授、施工は開拓使工務局営繕課が行った。この建物は二階を演武場、武庫、体操器械場、一階を博物館・同作業室、農学・

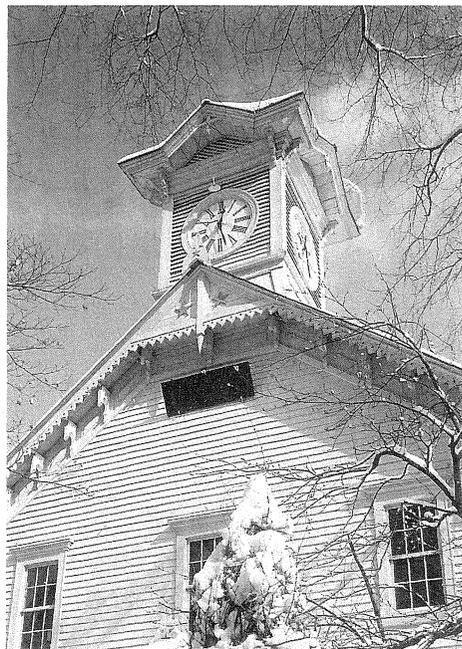
博物講堂、英語学・数学・理学教場として使用した。演武場の名は、北海道初期拓殖時の国防と開拓の指導者養成を目的とした札幌農学校の性格をよく表わしている。これは、当時アメリカ合衆国で州立大学に義務づけられていた兵学科設置制度にならない、マサチューセッツ農科大学のミリタリー・ホールがモデルと言われている。

の中央講堂として種々の行事が行われた。明治三十九年（一九〇六）札幌区に移管され、旧位置から一ブロック南側の現在地に曳屋、移築された。

外観は、軒廻りに練り形のある持ち送りや軒飾りをわずかに装飾的に用いるほかは、壁体を横羽目の下見板張りとした質素なもので、十九世紀にアメリカで生まれたバルーン・フレーム構造で出来ている。

二階の演武場は天井を張らず、桁をタイバーでつないだ特色ある小屋組をみせる。

旧札幌農学校演武場は、北海道における開



時計台正面入口を右手からみる

拓史上記念すべき遺構であるとともに、建築技術史的にも貴重な遺構である。

この重要文化財を訪れる人は、毎年六十五万人にものぼり、見る者を開拓時代に誘ってくれる。

(北海道教育委員会文化課主任 高橋 慶)

五稜郭跡——旧幕府軍の最後の舞台

函館の夜景展望の名所として知られている函館山から町を望むと、中心部に水を湛える濠と松の緑に囲まれた五つの突角をもつ星形



左上上空からの全景（写真提供は3点とも札幌市文化財課）

(五稜星形)をした洋式城郭跡が一際目につく。これが北海道唯一の特別史跡五稜郭跡である。五稜郭跡は大正十一年（一九二二）十月に史跡に指定され、昭和四年（一九二九）

四月の追加指定を経て、昭和二十七年（一九五二）三月に特別史跡に指定された。指定面積は約二五ヘクタールに及ぶ。

安政元年（一八五四）の日米和親条約により、箱館が開港場となった。幕府は北方防備と蝦夷地経営のため、箱館に奉行所、台場を、他方、南部藩、津軽藩、松前藩に陣屋を構築



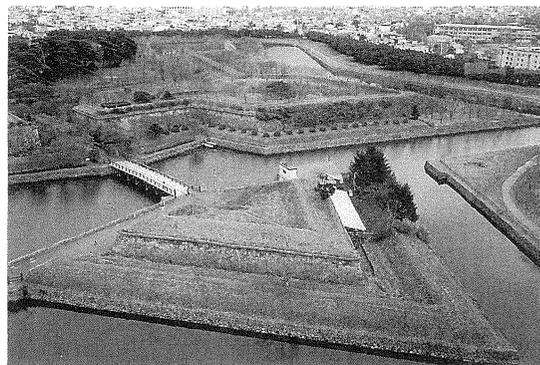
上空から見た五稜郭跡



郭内奉行所跡で確認された柱の礎石列

させるなどして箱館周辺の防備に当たった。幕府は当初、奉行所を函館山の麓に設置したが、この地は傾斜地で狭く、外国人の居留地区で、また海上からの砲撃を受けやすいなど不利な条件にあった。そこで、現在の五稜郭跡地へ移すことになり、安政四年（一八五七）に工事に着手し、約八年の歳月をかけて元治元年（一八六四）に竣工した。設計者は蘭学者の武田斐三郎で、オランダの築城書を基にフランスの築城法によったと言われて

いる。郭内は高さ約五メートルの土塁がめぐっており、壘内からの射撃は全く死角のないように工夫されている。郭外には幅約三メートル、深さ約六メートルの石積の濠がめぐり、また濠外の東、西、南の三方に低い長斜堤が築かれている。郭内への出入り口は三か所設けられているが、現在は大手、搦手側の二か所から橋を渡って出入りしている。また、大手の南側に三角状の半月堡（馬出し）が設けられている。



三角形の遺構「馬出し」から橋を渡って郭内に入る（写真提供は3点とも函館市教育委員会）

明治五年（一八七二）に新政府により奉行所の庁舎等が解体されたため、郭内には当時の建物として兵糧庫一棟だけが残っているにすぎない。平面図等の資料や保存整備のための発掘調査によれば、郭内には奉行所庁舎のほか、各種長屋、厩、板蔵、稽古場、弾薬庫、湯所等が設けられていたことが明らかになっている。

幕府崩壊に伴い、五稜郭は新政府に引き継がれる。明治元年（一八六八）に榎本武揚率いる旧幕府脱走軍に一時占拠されたが、翌年榎本軍は降伏している。このように、五稜郭は旧幕府軍の最後の戦（箱館戦争）の舞台となった。

毎年、この箱館戦争を題材に市民参加の野外劇が五稜郭を舞台にして公演されている。その他、冬期間にはイルミネーションを点灯したりして活用し、文化財保護思想の普及に努めている。現在、史跡保存整備も進行中で、今後、郭内も含めた整備が待たれるところである。

（北海道教育委員会文化課主査 木村尚俊）



史跡 三内丸山遺跡 史跡 根城跡



三内丸山遺跡全景

〈史跡〉三内丸山遺跡

青森市の中心部から南西へ約四キロメートル、南に八甲田連峰がせまり、西に遠く岩木山を望み、北を沖館川が流れる、標高約二〇メートルの台地上に三内丸山遺跡は位置する。

三内丸山遺跡は、古くから知られる遺跡で、江戸時代の日記である『永禄日記』の元和九年（一六二二）や、当時の旅行家である菅江真澄の著した『すみかの山』（一七九

九）に記録がある。なかでも菅江真澄は、寛政八年（一七九六）に三内を訪れたと

きのことを、絵を添えて紹介している。

戦後、三内丸山遺跡では、大学などによる小規模な発掘調査や、青森県総合運動公園の整備に伴う発掘調査が実施されたが、なかでも昭和五一年の総合運動公園西駐車場の整備に伴う調査では、二列に並ぶ土坑墓五六基が検出され、注目を集めた。

平成四年からは、県総合運動公園拡張整備事業の一環として、新県営野球場の建設に先立って発掘調査が着手された。建設予定地約五ヘクタールの調査が進むにつれ、縄文時代の前期中頃（約五、五〇〇年前）から中期末（約四、〇〇〇年前）ま

- 三内丸山遺跡へは、JR青森駅から青森市営バス三内丸山遺跡行きで三内丸山遺跡前下車。または東北縦貫道青森ICから車で5分。遺跡は年末年始を除き無休で公開。三内丸山応援隊ボランティアガイドによる無料の遺跡案内（4～11月）もある。問い合わせは、青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室（☎0177-22-1111）へ。
- 根城跡へは、JR八戸駅から南部/バス司法センター経由で根城（博物館前）下車。八戸自動車道八戸ICからは車で5分。問い合わせは、史跡根城の広場・管理事務所（☎0178-41-1728）へ。

での、長期にわたって営まれた集落であることがわかってきた。

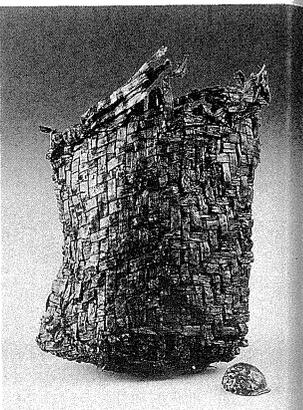
さらに、遺跡内に形成された泥炭層からは、木製品や漆器、骨角器や樹皮製品、動物や魚の骨、植物の種や木の実などが大量に出土し、当時の環境や暮らしを具体的に知り得る資料が豊富に包蔵されていることもわかった。

また、野球場予定地周辺の調査から、縄文時代中期には、三〇ヘクタールを越す範囲に人々の暮らしが広がっていたことも明らかにした。

このように、縄文時代に関する自然環境とその変遷、人々の生活や社会組織を解明できる可能性をもつ全国的に例のない極めて貴重な遺跡であることから、平成六年八月には野球場の工事を中止し、一二月には、県は歴史公園として整備していくことを決定した。

保存決定後、遺跡保護のため、いったんすべて埋戻し、平成七年四月から、その一部を掘り起こし、特徴的な遺構の公開を再開するとともに、短期整備を開始した。

南北の盛土や埋設土器（子どもの墓）、大型掘立柱建物跡、土坑墓（大人の墓）については、表面を化学的に処理するとともに、覆いをかけて保護し、見学が可



〈縄文ポシエット〉（三内丸山遺跡出土／縄文時代前期中頃）

能な状態にしている。

遺跡からの出土遺物については、遺跡内に設置した展示室で見学できるようにし、あわせて

発掘調査の状況を伝えるビデオにより、今では見学できない遺跡の姿を紹介している。

また、縄文時代の雰囲気を感じてもらおうと、当時の建物の復元も進めてきた。これまで、竪穴住居五棟、掘立柱建物（高床倉庫）三棟、長さ三メートルの大型竪穴住居一棟、遺跡のシンボルともいえる高さ一四・七メートルの大型掘立柱建物一棟、列

状をなす土坑墓四一基を復元した。そのほか、縄文時代の人々の生活や知恵を体験してもらおうと体験学習館を整備し、団体見学者の事前の希望を受けながら、随時体験学習が実施できる体制を整えている。

さらに、売店や軽食堂を備えた休憩所



〈大型板状土器〉（三内丸山遺跡出土／縄文時代中期中頃）

を設置し、三内丸山遺跡ならではのおみやげやメニューが楽しめる。

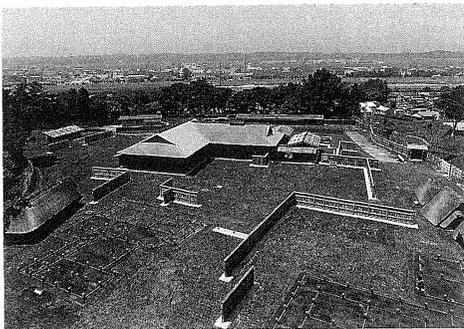
三内丸山遺跡の大きな特色として、民間団体である三内丸山応援隊によるボランティアガイド事業が挙げられる。遺跡の活用を市民の側から盛り上げようというこの活動は、遺跡と見学者の架け橋として、多くの見学者から好評を得ている。このように三内丸山遺跡では、縄文時代を体験できる公園としての整備が進められるとともに、市民の積極的なかわりのなかで、新しい遺跡と市民の関係の芽が育ちはじめている。

〈青森県教育庁文化課

三内丸山遺跡対策室 上野茂樹

〈史跡〉根城跡

八戸市は、青森県の東南部に位置し、工業・水産業を中心とした人口二四万人



復原整備された根城跡（本丸）

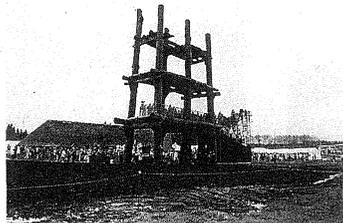
余りの産業都市として知られている。市内には是川石器時代遺跡、長七谷地貝塚、根城跡の三ヶ所の国指定史跡をはじめ、多くの県・市指定文化財があるが、今回はそれらの中から根城跡について紹介したい。

根城跡は、建武元年（一三三四）甲斐国の武将、南部師行により築城されたと伝えられており、寛永四年（一六二七）に岩手県の遠野に移封になるまで、約三〇〇年間わたって南部氏の北奥支配の拠点となった城である。

根城の南部氏は、南北朝時代には奥州における南朝方の中心的存在として活

青森県

多くの人々が訪れた「三内丸山・縄文フェスタ'96」



青森県

史跡の活用として野点も行われる



躍しており、その支配圏は当時、糠部郡とよばれた青森県東部から岩手県北部一帯を中心に、閉伊郡・鹿角郡・比内郡さらには津軽の一部にまで及んでいた。根城という城の名前は、このような大きな領地を支配するための中心に根とつながっていたことから、付けられたといわれている。

この城は、岩手県北部から青森県の太平洋に注ぐ一級河川「馬淵川」右岸の標高約二〇メートルの河岸段丘上に立地しており、史跡指定地の総面積は約二一ヘクタールである。

正月11日の儀式を再現する主殿内部の展示



城は、深い堀によって区画されたいくつかの郭が集まったものであり、本丸・中館・東善寺館・沢里館とよばれる郭などが、良好に保存されている。また、根城は街の中心部に近いこともあり、広い史跡指定地が市民の貴重な緑地として、朝夕の散

歩など憩いの空間としても頻繁に利用されている。

この史跡を復原するための発掘調査が昭和五三年から本丸で行われ、掘立柱建物や竪穴建物のほか、門・塀・柵・橋など城を特徴づける遺構が多数発見された。発掘成果から考えられる根城の性格は、単に軍事的な目的によりつくられた城というだけではなく、政務をつかさどる公的な施設、一族の居宅、職人の工房など様々な役割の施設が城の中に取り込まれたものであったと考えられている。

昭和六〇年度からは、発掘調査成果をもとに復原整備事業が始められ、平成六年には主な部分が竣工し、「史跡根城の広場」として公開されている。この事業の財源は、文化庁からの補助金を中心として自治省の起債や市単独予算も充てられている。

根城の整備事業の最大の特徴は、遺構を保護するための盛土を行い、その上に主殿・馬屋・門・橋・木橋・工房・鍛冶工房・納屋など多くの建物を復原したところにある。

特に主殿は、発掘調査に基づく中世の建物復原としては国内最大級のものである。しかし、発見されたすべての遺構を

復原できたわけではなく、上屋の推定が難しいものは、柱位置だけを示す平面表示にとどめている。

復原建物の内部には、出土遺物や南家に代々伝わる古文書・武器・武具などにに基づき、建物の使われ方や当時の儀式の様子を示す展示が行われ、自動音声解説装置も備えられている。

なお、本丸に隣接して位置する中館・東善寺館では、城の縄張が主に表示されているが、籠城に備えて植えられた実のなる木、観賞の対象となった樹木、薬草などが植栽され、遊びの空間としても活用されている。

これまで、ここを利用し「根城祭り」や「根城史跡を歩こう会」などが開催され、多数の市民がこのイベントに参加した。

根城の整備は、天守閣や石垣出現以前の中世の城を復原した全国的にも数少ない復原事例であるだけでなく、地域の歴史情報の発信拠点としても重要な存在となっている。

(八戸市教育委員会文化課

主任主査兼学芸員 工藤竹久)

(このシリーズは今月号をもちまして終了させていただきます)

ご存じですか？ こんな文化財⑫

(岩手県)

国宝 中尊寺金色堂

大型土偶頭部(科内遺跡出土) 遮光器土偶(手代森遺跡出土)

要財
重文化

岩手県は東北地方北部の太平洋側に位置し、中央部を南流・北流する北上川と馬淵川をはさんで、西側に奥羽山脈、東側に北上高地がある。盛岡市以南の北上川流域には平野部が広がり、全国一広大な県土の大きな部分を占める北上高地は本州で最も寒冷な地帯である。三陸沖でぶつかり合う親潮・黒潮の寒暖両流は、豊富な魚種や海藻を育み世界有数の漁場を産み出している。このように厳しく寒冷な

気候ながらも岩手の人々は、縄文時代には自然の恵みとともに豊かに生き、縄文文化の宝庫を築き上げた。昨年、当県で開催された第八回国民文化祭のテーマ「縄文発信・未来発見」はまさにその端的な表現であった。

〈国宝・中尊寺金色堂〉

縄文文化に次いで岩手の地にあつて華やかな光彩を放ったのは、平泉文化である。一〇〇年頃平泉に拠点を移した藤原清衡は、最初の事業として中尊寺を建立したと伝えられる。前九年・後三年の二つの戦いで父や妻子、親族を失った清衡にとつては、犠牲者の冥福を弔うとともに、再び奥羽が戦火で荒らされな



金色に荘厳された中尊寺金色堂内陣

ないため仏教により奥羽の向上をはかる必要があつた。清衡が中尊寺の建立に当たつて、都から一流の工人・技師を招き、すべて都の手法と技術を用いたのはそのためであり、平泉文化は基本的に都の文化であつた。

その平泉文化を代表

塗り金箔を貼りつめ、文字通りの金色堂となつている。建立当初木瓦まで金箔押であつたかは調査では確認できなかった。いずれにしても「皆金色」は都にない発想でまさに黄金を基盤にした平泉文化にふさわしい。

第二に「金銀萬宝」を尽くした内陣荘厳である。須弥壇(むみだん)の格狭間(さきま)には鍍銀鏡板に鍍金の孔雀を打ち出し、その周囲から天井の構造部材に至るまで金銀あるいは螺鈿細工による宝相華文様で埋め尽くす。四本の巻柱には漆芸のあらゆる技法を集めて仏を描き、夜光貝の螺鈿をちりばめている。内陣の荘厳にここまで工芸技法を尽くすのは例がなく、金色堂は「平安工芸の至宝」と讃えられる。



もとは全身像であつた大型土偶の頭部

第三に「三壇構成」と「遺体安置」である。

当初は中央壇のみで、建立から四年後に清衡の遺体が壇内の金箔押木棺に納められた。その後両脇壇が増設され、二代基衡、三代秀衡の遺体と四代泰衡の首が納められた。遺体の堂内安置は当時の葬法の一つであるが、四代にわたる遺体・首級は世界でも例がないという。昭和二十五年に遺体の学術調査が行われ、その価値とともに貴重な副葬品(重要文化財)が明らかにされた。両脇壇の増設時期は二代三代の死没期の一一五七年頃、八七年頃とされる。各仏壇上には阿弥陀三尊、六地藏、二天の計十一体が安置されている(重要文化財)。南壇の増長天は欠失。六地藏、二天の併安はほとんど例がなく、被葬者の極楽往生を祈念してのものと考えられる。

(岩手県立博物館 大矢邦宣)

多種多様な縄文時代の文物の中で、土偶は縄文文化の風俗や信仰などその精神生活をう

する金色堂は、方三間の阿弥陀堂で、中尊寺山内の中央部南寄りに東を正面にして建てられている。棟木墨書銘により天治元年(一一二四)清衡夫妻による建立が知られる。五・四八m四方と阿弥陀堂としては小型の金色堂が特別な注目を集めているのは、平安後期を代表する文化財であるほか、その内外の荘厳、仏壇構成、仏尊配置、遺体安置などすべての要素において、極めて異例づくめだからである。

第一に「皆金色」である。床から天井、内外の柱や扉、壁に至るまで、ヒバ材に黒漆を

かがうことのできる代表的な遺物である。ここでは、岩手県内から出土した重要文化財の土偶二点を紹介することとする。

ひとつは、縄文時代最大の土偶である盛岡市科内遺跡出土の大型土偶頭部である。科内遺跡は、盛岡市の市街地の西、奥羽脊梁山脈にいだかれた雫石盆地の東南端に位置し、北上川の支流雫石川右岸の沖積段丘上に立地している。

御所ダム建設に伴って昭和五十一年から行われた発掘調査の結果、縄文時代後期前葉から晩期初頭の多数の堅穴住居跡や墓壇などが検出されたほか、魃(か)状の漁撈施設や縄文人の足跡なども発見されている。

出土遺物には、多量の土器や石器のほか、漆製櫛や籃胎漆器等も発見されている。大型土偶は、北東部の墓壇群周辺から頭顔部・右耳・右脚部の三つに分かれて出土している。復元された頭顔部高は、二三cm、最大幅は二二・三cmとほぼ人頭大につくられ、丸顔で眉弓部が突き出し、大きくて高い鼻や開いた大きな耳など人体の特徴を細部まで写実的に表現している。

頭部は、縄文を施して頭髪を表現しており頂部に十字状に五つの円孔がある。頭部と顔面の境界は太い凹帯によって区分され、一段高く作られた眉弓部から頬にかけての顔面は



呪術的な遮光器土偶

◎2点の土偶は岩手県立博物館で常時公開しています。

岩手県立博物館
盛岡市上田字松屋敷34 ☎0196-61-2831
休館は毎週月曜（祝日の場合翌日）、
9月1日～10日（資料整理のため）
9：30～16：30（入館は16：00まで）

あたかも仮面を装着したように表現されている。目は閉じた状態である。

口は、楕円形に突き出し口唇部に刺突文が施されている。顎部先端には耳の直下から等間隔に円孔が並んでおり、頭頂部の円孔と同様に飾りものを装着して装飾用に使ったものと推定されている。

この大型土偶頭部には、同一個体とみられる脚部片等が出土していることから、本来全身像であったと考えられている。本土偶は、頭部の大きさからみても、縄文時代の土偶で群をぬいており、細部の写実も優れている。縄文時代後期の所産とされる。

もうひとつの土偶は、盛岡市の手代森遺跡

から発見された遮光器土偶である。縄文時代晩期の東北地方北部は、精巧華美な土器や漆工芸品に代表されるように高度な技術を持つ一方、多くの呪術的なものを作りだしている。その代表に遮光器土偶がある。

遮光器土偶の名は、極北地帯の民族が太陽および氷雪の反射光を遮るために用いる雪中遮光器に土偶の眼部の造形が似ていることから付けられた。

手代森遺跡は、盛岡市の市街地の南東約8kmほどの北上川左岸に形成された小規模な段丘上に立地する。調査の結果、縄文時代晩期の住居跡八棟が検出され、広場の空間から多くの祭祀遺物が出土している。

出土遺跡には、各種の土器のほか土偶をはじめさまざまな土製品や石製品がある。特に注目されるのは赤色顔料を塗彩した土偶や土偶・石器などが多く発見されている。

本土偶は、遺物包含層の東端付近から発見され、頭部・右腕部・胴脚部のそれぞれ約6cm離れた三か所より出土している。接合・復元した土偶の大きさは高さ三一・〇cm、幅一九・一cm、厚さ九・五cmである。

王冠状の頭部をもち、顔面は遮光器状の大きな目が大半を占め、中央に輪状の鼻があり両脇に耳状の張り出しをもつ。口と顎の一部は、欠損している。

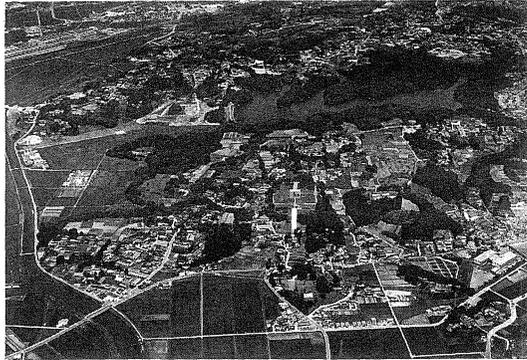
首にはネックレスを想定させるような隆帯が巡らされており、胴部はややずんどうで肩幅・腰幅とも広い。乳房は両端に寄り、下腹部には臍を強調した高まりがつくられ中央が穿孔され、両足の付け根にも孔をもつ。

表面は黒色処理されているが、頭部や胴部にベンガラを材料とする赤色顔料が残されていることから、かつては全面に塗布されていたと考えられる。中空に作られ、王冠状の頭部、遮光器を付けたように誇張された目、上部で膨らみ手首・足首で急にすぼまる腕や脚部をもつなど遮光器土偶の特徴が顕著に表れている優品である。

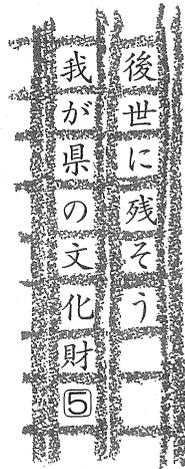
（岩手県立博物館 高橋信雄）

宮城県

多賀城跡全景



特別 史跡 多賀城跡



我が宮城県を代表する文化財はと言えば、先ず今紹介する「特別史跡多賀城跡」を挙げないわけにはいかない。七世紀後半に古代国家が成立すると、間もなく現在の福島・宮城両県に当たる範囲が陸奥国となり、それにやや遅れて八世紀初頭には出羽国が置かれた。山形・秋田県に相当する範囲である。ところが、事情はやや複雑であるが、それ以北の地はいわば国外として取り残されてしまったのである。そしてそこに住む人々は「蝦夷」と蔑まれ、当時の記録にはあたかも未開・野蠻の異民族の如く表現されている。

●多賀城跡へは、仙台駅からJR仙石線本塩釜駅下車、徒歩20分。
詳しい問合せは下記へ。
東北歴史資料館 ☎022-368-0101
9:30~16:30 毎週月曜休館
同資料館では、冬季を除く毎火・木・土曜14:00から来館者を対象に「多賀城跡巡り」を実施している。(団体は別途申込みにより随時実施)

このように当時の東北地方は、「蝦夷」と境を接するということで、「辺境」と認識され、他の地域とは別な扱いがなされた。陸奥・出羽以外の国では地方行政機関として「国府」があり、その下部機関として郡ごとに「郡家」が置かれたのであるが、辺境たる東北地方はそうではなかった。具体的には、中国の制度をまねて、国府に代わるものとしての「柵」・「城」が設置されたのである。当時の文献には二十余の「柵」が記録されており、その代表格が他ならぬ「多賀城」というわけである。

ところで、文字として「柵」・「城」を見ると、とかく「柵」的な施設、つまり軍事基地を連想するのは致し方ないことだろう。極端な場合など、古代の東北柵は、アメリカ映画西部劇によく登場した「アパッチ柵」の如きもの、とする説明さえなされていた。これからやや詳しく述べようとする「多賀城」像は、我々が行った三〇年余りの発掘調査結果に基づき事実であり、あるいは昔教科書で習ったことと大いに違うかもしれない。前置きがやや長くなってしまうが、では遺跡の実体を見ていきたい。東北唯一の政令指定都市仙台もすつかり近代化

宮城県

も、創建を八世紀初頭と見ても大きな矛盾はないので、現在多賀城の創建はその頃と考えている。

では多賀城の性格・役割はどうであったか。結論を記すと、多賀城は、①陸奥国府・鎮守府、②陸奥・出羽両国を併せ治める、③いわゆる蝦夷の人々と広大な土地を国内に取り込む、であった。すなわち、①は他の諸国と大差ないのであるが、②は東北全域を対象にした広域行政ということになる。③はいわば対蝦夷外交である。

古代においてこのような例を他に求めると、大宰府が思い付くであろう。大宰府は九州全土に威令を及ぼして「遠の朝

延」の別称があった。加えて中国・朝鮮外交の窓口だったのである。「広域行政」と「外交」を司る点に着目すると、多賀城はまさに大宰府と共通の性格・役割があり、地域こそ西と東の違いはあっても同様の期待が込められた巨大官衙であったのである。

これまでに巨大な官衙「多賀城」をおぼろげながらご理解いただけたかと思う。八〇ヘクタールにも及ぶ城内各所の平坦面を調査すると、現在の部局に相当すると考えられる遺構が検出される。残念ながら簡々について具体的な役割を特定するまでは到っていない。ところで多賀城本体とやや離れたところで、日本初の「国守館」が発見されており、今ならさながらペンツに相当するであろう「名馬」を陸奥国守が右大臣に贈った旨の木簡が発見されている。

九世紀になると、多賀城南門に通じる南北方向の「大路」と、それにほぼ直交し南辺築地と五町離れた位置に東西方向の大路が造られた。そして南北七町・東西十町程の範囲に、おおよそ一町四方を道路で区切った、「方格地割り」による「街並」が形成されている。地方官衙で街並が明らかになったのは、ここ多賀城が全

本の山城、例えば福岡県大宰府市・大野城市にある大野城と同様の「土塁」とみなされていた。一方政庁部分は、江戸時代には「一の丸」、明治時代には「牙城」と、そして発掘調査を開始した昭和三〇年代半ば頃までは、「内城」と呼ばれていたのである。このように多賀城は軍事基地「山城」と同列に扱われており、その機能も同様であったであろうと解釈されていた。

発掘調査の結果は、この従来の定説を見事に覆したのである。区画施設は平城宮と同じ「築地」だから、少なくとも外観は平城宮と大差なかったことになる。さらにミ二朝堂院とも見られる「政庁」の存在。これを総合すると多賀城はもはや官衙以外考えられず、ましてや軍事基地などではないのである。むしろ他の国府とか、あるいは大宰府との共通性を考えたほうがより適切なのである。

さて多賀城はいつ造られたのであろうか。当時の文献には何ら記載は無いが、南門を入ってすぐの右手に「多賀城碑」通称壺碑が立っており、そこに極めて重要な情報が刻まれているのである。それによると、多賀城は神龜元年（七二四）大野朝臣東人の創建とある。考古学的に

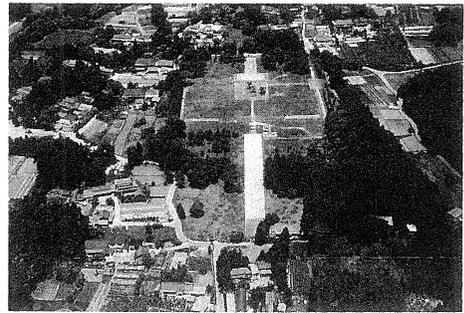
復原予定の南門(宇都)



してしまい、今やかつての「杜の都」の面影を失ったが、それはともかく多賀城跡は、その仙台市と、我が県を代表するもう一つの文化財「特別名勝松島」のほぼ中間に位置する行政区画では、多賀城市市川・浮島であり、仙台平野の北東部を限るように塩釜市から西に張り出す低い丘陵の先端部を利用して築かれている。JR東北本線で仙台を発ち青森方面に向かうと、三つ目の駅が陸前山王駅だが、そこを通過して間もなく、車窓左手にその丘陵が見えてくる。遺跡は最高五メートルの丘陵上と最低三メートルの低地に跨るよう

ここで発掘調査以前は多賀城の遺構に対してどのような解釈がなされていたかを振り返ってみよう。外郭の区画は西日

国最初である。ところで多賀城跡の調査は昭和三五年に開始されたが、その後四五年宮城県は多賀城跡調査研究所を設立した。特定の遺跡を継続的に調査する目的で研究所を発足させたのは県立としては全国的にも初めてであった。以後調査と並行して調査結果に基づく整備が行われ、広大な歴史公園が出来つつある。県は昭和四九年多賀城跡の東南に接する地に東北歴史資料館を建設した。東北全般の歴史を紹介することに主眼を置きつつ、積極的に多賀城跡の活用を努めている。



小型の「朝堂院」、政庁跡

一〇五〇メートル、西辺六六〇メートル、北辺が八七〇メートルである。形はややいびつな方形であるが、それは西から伸びる先細りの地形に左右された結果と思われる。

さて構造であるが、外郭施設は基礎幅三メートル、高さ五メートルで瓦葺の「築地」と呼ばれる土塀である。規模・構造とも平城宮の築地と共通していることは注目される所で、当時は第一級の官衙あるいは寺院の区画施設に限って用いられた。南正面には南門が、東辺北よりには東門、西辺南よりには西門がある。南門を城内に入って三五〇メートルほど北に進んだ所には、ほぼ一〇〇メートル四方の規模を持つ「政庁」がある。それは各時期で若干の相違はあるものの、原則的には中央に正殿があり、左右前方に脇殿を置き、正殿後方に後殿を配している。正殿・脇殿で包むように広場がある。正面には南門があり、全体を外郭より規模の小さい築地で囲っている。平城宮にたとえるなら小型の「朝堂院」ということができよう。

このように多賀城は軍事基地「山城」と同列に扱われており、その機能も同様であったであろうと解釈されていた。

発掘調査の結果は、この従来の定説を見事に覆したのである。区画施設は平城宮と同じ「築地」だから、少なくとも外観は平城宮と大差なかったことになる。さらにミ二朝堂院とも見られる「政庁」の存在。これを総合すると多賀城はもはや官衙以外考えられず、ましてや軍事基地などではないのである。むしろ他の国府とか、あるいは大宰府との共通性を考えたほうがより適切なのである。

さて多賀城はいつ造られたのであろうか。当時の文献には何ら記載は無いが、南門を入ってすぐの右手に「多賀城碑」通称壺碑が立っており、そこに極めて重要な情報が刻まれているのである。それによると、多賀城は神龜元年（七二四）大野朝臣東人の創建とある。考古学的に

陸奥国守が右大臣に馬を贈ったことを示す木簡、「右大臣殿、馬馬取文」の文字がよめる。



陸奥国守が右大臣に馬を贈ったことを示す木簡、「右大臣殿、馬馬取文」の文字がよめる。

さらに宮城県は平成一〇年オープンを目指して、近くに二万平方メートルを超える「東北歴史博物館(仮称)」を建設中である。博物館では、なお一層多賀城跡発掘調査成果の公開を進める計画で、現在鋭意検討中である。また一方で、多賀城市は一〇年完成を目標に多賀城南門の復原に取り組んでいる。博物館を拠点とし、多賀城跡全体を「野外博物館」と位置づけ、多くの人々に「多賀城」を理解していただけるのが一日も早からんことを念じている。

宮城県教育庁文化財保護課
文化財専門監 桑原滋郎

秋田県



武家屋敷のたたずまいを色濃く残す角館の石黒家



角館町角館

伝統的建造物群保存地区

重要文化財 磨製石斧

- 角館町角館伝統的建造物群保存地区へは、盛岡駅からJR田沢湖線角館駅下車、徒歩15分。武家屋敷の公開は、各家によって異なるが、およそ9:30~16:00まで。詳しい問合せは下記へ。
角館町教育委員会文化財課
☎0187-54-4101
- 磨製石斧が常設展示されている秋田県立博物館へは、JR奥羽本線(男鹿線)追分駅下車徒歩15分。詳しい問合せは下記へ。
秋田県立博物館 / ☎0188-73-4121
毎週木曜休館(祝日の場合は翌日)
9:30~16:30(11月~3月は~16:00)

〈角館町角館伝統的建造物群保存地区〉

角館町の町並の原形は、関ヶ原の戦い後の慶長七年(一六〇二)、秋田に転封された佐竹義宣の弟である芦名義勝によって造られたものである。

芦名氏は、慶長八年に佐竹氏から一万五千石を分知され、旧領主戸沢氏の居城であった角館城に拠ったが、元和元年(一六一五)、幕府が公布した一国一城令により城の破却を余儀なくされ、五年後の元和六年には心機一転、城の北麓にあった旧城下町とは反対の真南の山麓の原野を

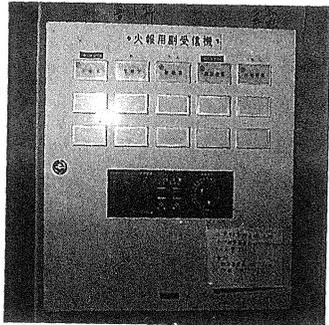
開き、新しい町を造った。この時の町割が、今日の角館町の基礎となっている。

やがて承応二年(一六五三)、芦名家は断絶し、同町には佐竹北家が所預として配置され約二〇〇年の支配を経たのち、近代を迎えた。町並は佐竹北家時代そのまま引き継がれ、近代以降も維持されたが、とりわけ武家屋敷群は、町の歴史と風土に並々ならぬ誇りを持っている角館町の人々によって営々と守り継がれてきた。

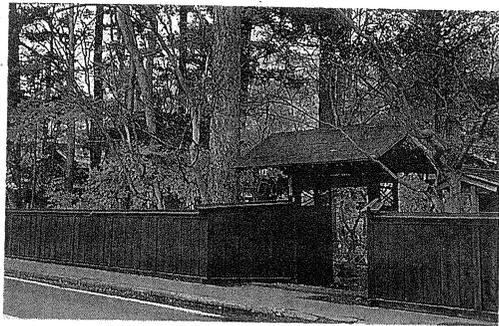
芦名氏による町割は、古城山南麓に構築した領主の館を起点として南に伸びる三本の路を通し、その中央のものを幅員一メートルの幹線路とし、北側を武家町(内町)、南側を町人町(外町)とした。さらに、武家町と町人町の間には幅二メートルの火除地を設け、町境を明確にした。内町の構成は、中央の幹線路沿いが上・中級武士の屋敷、西側が武士や足軽屋敷となっている。

このうち、昭和五年に選定された重要伝統的建造物群保存地区は、武家町の中央部である表町上丁、同下丁、東勝楽町を縦断する内町の幹線路七六〇メートルの両側に屋敷割された上・中級武士の居住区で、選定面積約六・九ヘクタール

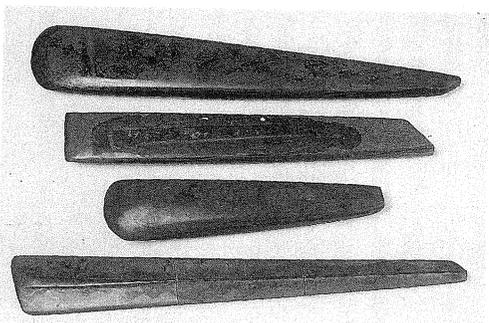
秋田県



武家屋敷の火災警報装置の端末部を消防署の管視下に置き、防災・保存につとめている



棟門形式の表門をもつ小田野家



秋田県立博物館に所蔵されている大型の磨製石斧

〈重要文化財「磨製石斧」〉
 大型の磨製石斧四個である。石斧は昭和四〇年に秋田県の南に位置する東成瀬村田子内で発見された。出土地は成瀬川に面する段丘上で、県道工事が行われた際に地表下約五〇センチメートルの地点から一括して出土した。
 石斧はいずれもにぶい青灰色の緑色凝灰岩を素材に、擦切技法を用いて短冊状に加工されている。刃部は弧状、直状、斜状と形態は様でないが、いずれも蛤刃で平滑に磨き出されている。表面も刃

部同様にていねいな磨きが施され、全体が光沢を帯びている。大きさは最大のもので全長六〇・二センチメートル、最小で三二・〇センチメートルといずれも大型で、うち一個については側面中央部に基部から先端にかけて一直線に稜が作り出されている。

石斧の時期については伴出遺物がなく、今のところ明確に断定できないが、周辺から縄文時代前期を中心とした土器が多く出土していること、製作技法が通常の擦切技法に類することなどから縄文時代前期に所属するものと考えられる。

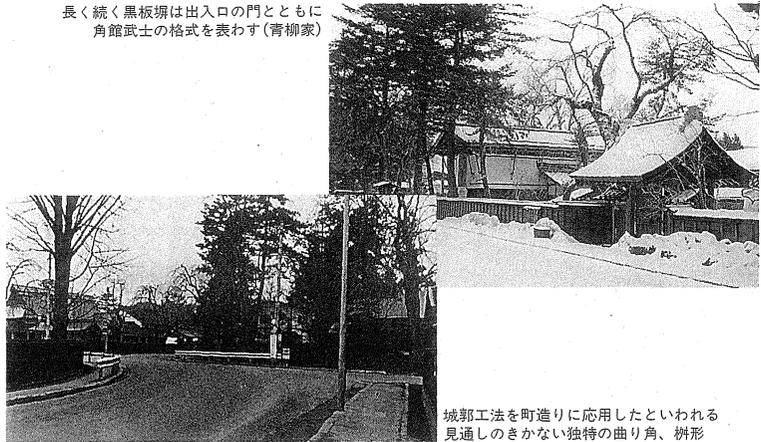
また、石斧の出土はあたかも一括して埋納された状況であり、通常の石斧とは異なる非実用的な大きさであること等から、当時の宗教的儀礼にかかわる祭祀的なものと考えられる。

縄文時代の社会構造や石器の製作技術を知る上で貴重な遺品と言えよう。

なお石斧は現在、秋田県立博物館に所蔵されているが、同館にはその他、重要文化財の面付環状注口土器も合わせて展示されており、東北地方の原始を知る上で大きな手がかりを得ることができ

（秋田県教育庁文化課 学芸主事 熊谷太郎）

長く続く黒板塀は出入口の門とともに角館武士の格式を表わす（青柳家）



城郭工法を町造りに応用したといわれる見通しのきかない独特の曲り角、枳形

に及ぶ。現在のこの地区における屋敷配置は、享保年間や万延元年（一八六〇）の「角館町屋敷割絵図」に照らしても大きな変化はなく、ほぼ江戸時代の屋敷割を留めていると言えよう。

角館伝統的建造物群保存地区の中心を成すものは、主屋を含む伝統的建造物で、北から石黒家（町指定史跡）、青柳家（県指定史跡）、岩橋家（県指定史跡）、河原田家、小田野家と配置されている。これらの武家屋敷内の建物は、部分的な改造も見受けられるが、大部分は江戸期の建物のままであり、良好な保存を目指しての努力が図られている。
 道路に面してそれぞれ板塀を巡らし、側溝には地場産の安山岩である大威徳石を用い、正面に薬医門を構えて建ち並ぶ武家屋敷群は、往時の質実な武家町を彷彿させる。
 内町では防御のための工夫も見られ、城郭工法の応用とも言える枳形が表町と東勝楽町の接点に設けられ、両町の道路は真直には繋がらずこの枳形を折れて連結される構造となっている。
 この地区の武家屋敷は、住宅が通りに接して建てられてはおらず、門と主屋の間に庭が造られているものが多い。庭は、シングルザクラ（天然記念物）やモミなどの巨木や草花に彩られ、あたりには静寂な雰囲気漂う。庭を通ると玄関と座敷があり、座敷部分には周囲に「土縁」が廻されている。土縁は雪国の農家によく

見られるもので、一間の下屋の内、半間を板縁、残る半間を土間にし、その外側には障子張の高窓の付いた雨戸をめぐらせた縁のことである。武家屋敷の主屋の構造はそれぞれに違い、石黒家は屋根が茅葺で寄棟造、青柳家も茅葺で寄棟造であるが、岩橋家はこけら葺で切妻造というようにバラエティに富み、見学に訪れた人々の興味を引きつける。
 町並の修理・修景事業は、すでに昭和五二年度から開始され、防災施設の設置も平成六年度に完成している。

角館伝統的建造物群保存地区の四季は変化に富む。春は新緑の樹木群の中に点在するシングルザクラが所狭しと咲き誇り、夏には内町全体が深緑に包み込まれる。秋には霜に照り映える紅葉が目にし、冬にやがて枯葉が舞い散れば冬である。冬に町を訪れる観光客はめつりり少なくなるが、新雪に覆われた町並は凍てつく寒さと相まって鮮烈である。

こうした、自然の移ろいと武家屋敷群が緩なす情緒や静寂なたたずまいが角館伝統的建造物群の魅力であり、年間約一五〇万人の見学客が訪れている。

（秋田県教育庁文化課 課長補佐 渡部弘一）

山形県



山形県旧県庁舎及び県会議事堂全景(右：旧県庁舎、左：旧県会議事堂)

重要文化財 山形県旧県庁舎 及び県会議事堂 国宝 紙本金地著色洛中洛外図



重要文化財

山形県旧県庁舎及び県会議事堂

山形県旧県庁舎及び県会議事堂は、奥州最上氏の居城であった山形城(史跡)城下の北東のはずれに位置する。この場所は、明治政権下の初代山形県令三島通庸の執政の下、都市計画によった開墾が行われたところである。明治一〇年(一八七七)に木造洋風建築の県庁舎、同一六年に県会議事堂が建設され、官庁街として整えられた。周辺には旧済生館本館(重文)や旧山形師範学校本館(重文)等数多くの洋風建築が修復保存されている。明治四四年(一九一)に起きた火災によって県庁舎とともに官庁街が焼失し

- 山形県旧県庁舎及び県会議事堂へは、JR山形駅から千歳公園行または沼の辺行バスで「山形市役所」前下車。公開日は月曜日、第3日曜日、年末年始を除く毎日の9:00~16:30。問い合わせは、山形県郷土館「文翔館」へ。☎0238-35-5500
- 紙本金地著色洛中洛外図を所蔵する米沢市立上杉博物館へは、JR奥羽本線米沢駅下車、車で10分。公開期日は年度によって異なる。問い合わせは、上杉博物館へ。☎0238-23-7302

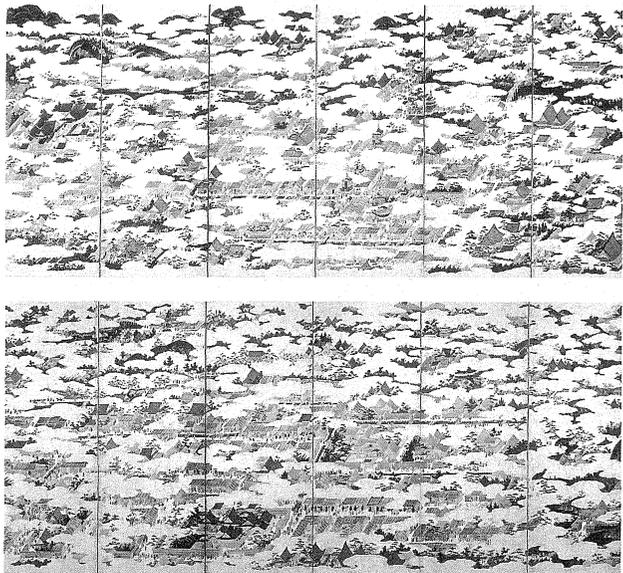
た。そのため、耐火建築物としてレンガ造での再建計画があがり、大正二年(一九一三)から基礎工事にかかり、同五年六月に完成した。これが現在の旧県庁舎及び県会議事堂である。設計は、ジョサイア・コンドル(工部大学校II現東京大学工学部教師)の下で経験を積んだ田原新之助があたり、中條精一郎が設計顧問として参画している。

旧県庁舎は、桁行六二・七メートル、奥行四二・八メートル、中庭のあるロの字型平面の南を正面にした三階建てである。一階を半地下にして、車寄・玄関を二階に設けている。そして、中庭側に巡らせた廊下から各室に通じている。一階は機械室・倉庫を、二階は事務室を、三階は事務室の他に正庁・知事室・内務部長室等の重要な室をそれぞれ配置している。重要な各室の内装は事務室とは違い、絨毯、壁紙、カーテン、シャンデリア等で豪華に飾られている。特に、天井は漆喰で造られた草花模様の彫刻が配された飾り天井である。

外観は、レンガ積みを中心に花崗岩を化粧積みして外壁を仕上げ、軒蛇腹石を経て屋根にパラペットを飾る。スレートで葺かれた屋根面には、銅板葺の屋根窓を

山形県

に直接墨書されたモチーフ数二三〇余、描かれている人物およそ二、五〇〇人。精緻な描写ながら煩雑ではない。本屏風には、京の市街地（洛中）と郊外（洛外）のさまざまな場面が描かれている。京の町の風情、その中でひとときわ目立つ檜皮葺の建物群は天皇の住む内裏であり、正月の風景となっている。金色の雲をつき



(上)洛中洛外図右隻 (下)左隻

とまがない。応仁の乱によって荒廃した京の町の復興を活写している。世に洛中洛外図は複数存在する。しかし上杉本の品の良さは出色の出来栄なのである。それら芸術的・美術的価値に加えて、一六世紀までさかのぼる初期の作例として極めて貴重であり、室町時代末期の都の風俗が克明に描かれていること

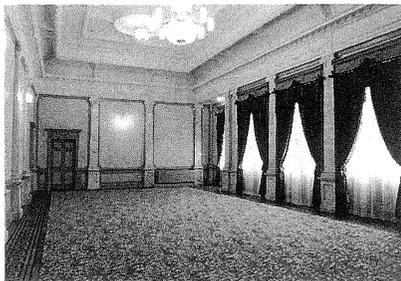
破り、京の町をわきかえらせる山鉾巡行。この祇園祭の描写は洛中洛外図屏風の圧巻といえる部分であり、祭りは今も夏の京都の風物詩である。鴨川では川狩りと呼ばれる夏の鮎漁が行われ、子どもたちがにぎやかに泳いでいる。嵐山は紅葉の季節。渡月橋を紅葉をかざした老若男女が渡っている。洛中洛外図はその場所に最もふさわしい季節を配した京都の名所図絵ともなっている。公方様とある足利將軍の館と、管領の細川邸。そして師走を迎え正月の準備に忙しい庶民の暮らし。鹿苑寺金閣は冬景色。屋根や木々に雪が積った高尾神護寺の静寂感に都大路のにぎにぎと対照的である。季節はめぐり洛北鞍馬は桜が満開だ。郊外では田起こしが行われている。雅楽の音、群衆の歓声、水流の音、駆け抜ける足音、動物の鳴き声……思遣いが伝わる。モチーフごとの情景や謎を言及するのに枚挙のいとまがない。応仁の乱によって荒廃した京の町の復興を活写している。

から風俗史、芸能史、建築史、文学史などさまざまな分野において注目される資料となっている。屏風に描かれた景観年代については、専門家の間で諸説があり、そこから作者狩野永徳に対する異論も示されたが、美術史側に疑う説はない。また、他の洛中洛外図との比較や屏風の発注主、贈り主について考察・再考する研究など多くの課題を提供している。

本屏風は昭和二十八年、絵画の部で重要文化財に指定され、平成七年六月、国宝となった。洛中洛外図の見方、楽しみ方は人それぞれである。織田信長の時代は確か南蛮人がいたはずと、南蛮人探しをしていた青年がいた。専門家もいる。いまや世界中の注目するところとなった第一級資料の上杉本洛中洛外図、万全の態勢で後世に伝えていかなければならないと同時に相反するところの活用もまた大切なことだ。単なる展示にとどまらない国宝上杉本洛中洛外図にふさわしい活かし方が必要であると考えている。現在、展示についても原本は概ね年に春・秋二度の展示としているため、コロタイプ印刷に手彩色を施した、実物に限りなく近い良好な複製をつくり対応している。

(米沢市立上杉博物館)

学芸員 角屋田美子



旧県庁舎三階正庁内部

並べ複雑な意匠を生み出している。さらに、正面中央の屋根を一段高くし、その上に時計塔を据えて威厳をみせている。時計塔は、複雑な曲面を銅板で覆い、装飾性豊かに造られ、大きな文字盤が四面にはめ込まれている。その内部には、当初からの分銅吊り下げ式の機械時計が据えられていて、

現在も時を刻んでいる。旧県会議事堂は、旧県庁舎の西側に位置し、桁行三六・四メートル、梁間八・二メートル、二階建ての南棟を渡り廊下で繋いでいる。さらに、南棟背面側に梁間一六・四メートル、奥行三一・九メートルの平屋建ての議場を取付けるT字型平面で造られている。南棟には、議員控室や来賓室が配されている。議場は、両側に六本の独立柱を立て、かまぼこ型のヴォールト天井を組み上げ、広い空間を造り出している。さらに、天井頂部に屋根窓からの明かりがさし込むガラス貼りのトップライトが造られ、それ以外の天井面には花柄模様の壁紙が貼られ、華麗な雰囲気を出している。

当時は、議場奥にある演壇上に議長が座り、三五人の議員が馬蹄形に机を並べ、独立柱の外側に県関係者や記者の席が配され、入口側に長椅子を置いた傍聴席が設けられて議会を開いていた。議場の特徴は、机・椅子が床に固定されていないことで、議会がないときは公会堂として使えるように計画されており、ここで音楽会・講演会・祝賀会なども催されていた。外観は旧県庁舎と違い、レンガ積みみで化粧壁に見え、柱形に花崗岩を積み上げ意匠を変えている。玄関の両脇に門灯を据え、その上部屋根のパラペット壁面には「山形縣 縣會議事堂」の文字が陰刻されている。昭和五九年、重要文化財に指定され、昭和六一年から保存のための修復工事が行われた。工事にもなる調査の結果、昭和五年に議場の改造が行われたり、昭和二〇年に旧県庁舎の三階の漆喰塗天井を解体撤去したりした改造経過がわかってきた。このため修復工事では、改造が行われた部分の復原をめざすとともに、レンガ造としての構造的弱点の補強と、今後の活用計画に沿った設備の整備を行った。すべての修復工事が完了した平成七年



洛中洛外図 (上杉本) 左隻に描かれる大堰川、嵐山の風景

一〇月から山形県郷土館「文翔館」として公開されている。

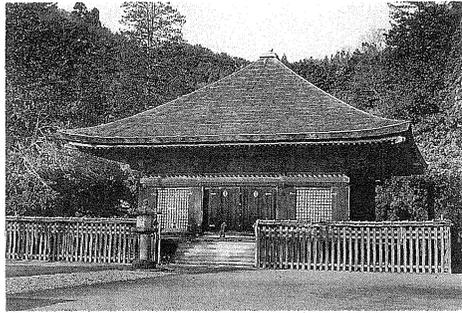
(岡文化財建造物保存技術協会職員 高橋好夫)

【国宝】紙本金地著色洛中洛外図

通称上杉本洛中洛外図屏風は、「北越軍記」「上杉年譜」「北越家書」等の古記録により、桃山時代の代表的な画家狩野永徳の作品で、天正二年（一五七四）に織田信長が上杉謙信に贈ったと伝えられている。現在は米沢市の所有であるが、もとは謙信の子孫である米沢藩主上杉氏が代々所蔵していた。

右隻、左隻各一六〇・六センチメートル×三三三・六センチメートルからなる六曲一双の屏風は、全面に金をあしらった大変ゴージャスな印象を与えるが、それは決して重くはなく、厭味でもない。画面

福島県



白水阿弥陀堂全景

重要伝統的
建造物群保存地区

国宝 白水阿弥陀堂 (史跡 白水阿弥陀堂境域) 下郷町大内宿



●白水阿弥陀堂及び境内へはJR常磐線内郷駅下車、車で10分。
詳しい問合せは下記へ。
願成寺/いわき市内郷白水町広畑31
☎0246-26-3079
いわき市教育委員会文化課
☎0246-22-7544

●下郷町大内宿へは会津鉄道湯野上温泉駅下車、車で10分。
見学所要時間は約40分。地区内の「町並展示館」ではイベント等も。
下郷町町並展示館/☎0241-68-2657
9:00~16:30、休館
は年末年始のみ

〈国宝 阿弥陀堂(白水阿弥陀堂)〉

国宝白水阿弥陀堂は、福島県の太平洋岸地域(浜通り地方)の南端に位置するいわき市に所在している。

この阿弥陀堂は、寺伝によると奥州平泉を本拠として当時の東北地方に大きな影響力を持っていた藤原秀衡の妹である徳姫が当地の領主であった岩城則道の人となり、夫の死後、その菩提を弔うために永暦元年(一一六〇)に、この地に建立させたと伝えられている仏堂である。

この建物は、方三間(桁行・梁間とも九・四〇メートル)、宝形造、とち葺、総円柱の身舎の四周に幅二メートル余り

の切目縁を廻らす中規模の仏堂で、特に宝珠をもつ緩やかな勾配の屋根とその反り等に平安時代後期の建築様式の特徴が見られる。

これらの特徴から、明治三五年に特別保護建造物として指定され、昭和二十七年には国宝に指定されている。

正面三間と両側前端的の各一間、および背面中央に板扉を設け、その他は横板敷とし、柱上には和様の一手先斗栱(中備には間斗束を配している)。

堂内は中央の一方一間を内陣として奥の柱間に框付の来迎壁を設け、天井は折上小組格天井、外陣にも後補の片折上小組格天井を張っており、内陣の仏壇には重要文化財に指定されている木造阿弥陀如来および両脇侍像、木造持国天・多聞天像が安置されている。

外廻りは白木造ながら、堂内の内陣内法長押や天井、来迎壁などには宝相華(ほうそうけ)の彩色、内法長押隅部には漆塗金箔(うす)の彩色、内法長押隅部には漆塗金箔押の鍔板などの装飾を施した痕が認められ、阿弥陀三尊以下を安置する仏壇も、腰格狭間、勿高欄付の黒漆塗のものである。

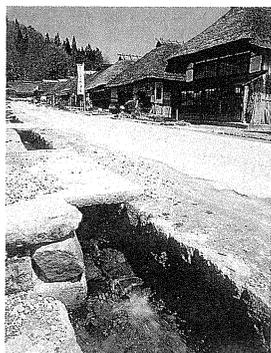
また、北・東・西の三方を小高い丘陵に囲まれ、南側が開けた地形の中心に南

福島県

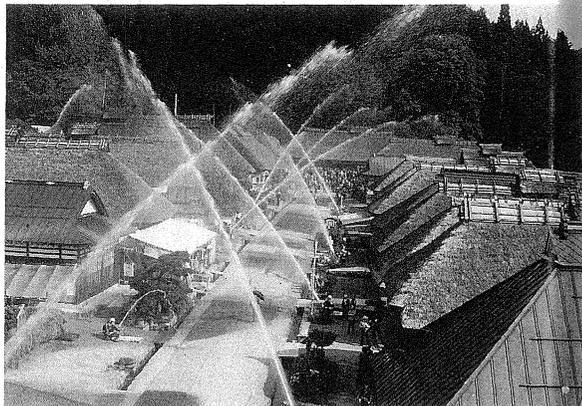
け、軒を「せがい」または化粧垂木だまきで飾っている。
街道と主屋の間の部分は「表」と呼ばれ、馬をつないだり荷物を積み替えたりする場所だったという。主屋の裏側には土蔵や納屋などの付属屋が配されている。街道の両側には、割石積の水路が走り、



茅を置きかえる



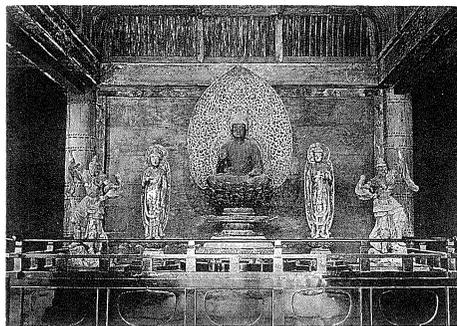
いまでも活用される水路



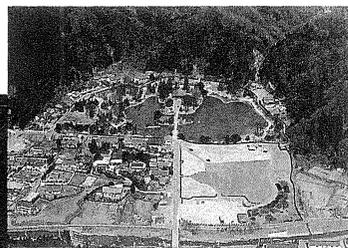
大内宿での防火訓練

ところどころに洗い場が設けられている。この水路は、当初生活用水として街道の中央にあったが、明治一九年に道路拡張のため街道の両側に付け替えられたものである。保存地区全域の総合防災施設整備に伴う発掘調査により中央水路の遺構が確認され、出土品からも近世に使用されていたことが判明している。
主屋のほかに、伝統的建造物として特定されているものとして、街道の北端には、正法寺子安観音等の仏寺があり、また、街道からやや離れた西方の小高い山

には鎮守の高倉神社がある。さらに、これら伝統的建造物群と一体となって歴史的風致を形成している周囲の環境を保存するために必要な物件として、高倉神社の社叢と本陣跡地のイチイの木が特定されている。
大内宿は、会津及びその周辺地域にみられたこの地方の近世宿場形態の典型的なものの一つで、山々に囲まれた周囲の環境とともに、現在もなお往時の形態をよく残していることから、昭和五十六年四月、重要伝統的建造物群保存地区に選定された。
選定後の修理修景事業の実施により、景観の保全が図られてきたが、平成五年度で総合防災施設整備が完了したことにより、トタン屋根が撤去され茅葺に復元される日も近いことと思われる。
また、保存地区外ではあるが、街道には今も一里塚や石畳等が残っており、歴史の道として再興されれば、大内宿に新たな価値をつけ加えてくれるだろう。
山間にひっそりたたずむこの村の縁側に腰かけて、のどかな田園風景を眺めながら、遙かなる時をこえ、この宿場で旅の疲れを癒した旅人に思いを馳せてみたい。
(同課主査 渡部洋子)



堂内に鎮座する阿彌陀如来



境内全景を上空より

面して建てられている阿彌陀堂を中心に浄土式庭園が広がっており、史跡「白木阿彌陀堂境域」として指定され、昭和四十七年から平成五年まで復元整備が行われ、

当時の姿が再現されている。
阿彌陀堂の前面に広がる苑池には、中島が配されており、南門から二つの橋を渡って阿彌陀堂に行くような配置となっている。
庭園整備に伴う発掘調査で出土した遺物は土器を中心とするもので、十二世紀後半に属するものに限られ、永暦元年創建という寺伝もそれほど根拠の無いものではないと考えられている。

永暦元年は、奥州藤原氏が三代秀衡に受け継がれたばかりの時期であり、藤原氏の勢力が充実する時期であったため、この地方にもその勢力が及んでいたと考えられるが、平泉に建立された毛越寺などの諸寺院と比較すると、寺院の建物配置や苑池の構成要素に簡素な様相が見られ、きわめて対照的な造りとなっている。

(福島県教育委員会文化課 文化財副主査 荒木 隆)

〔下郷町大内宿伝統的建造物群保存地区〕
下郷町大内宿がある福島県の会津地方南部は、中世、近世を通じて南山の名で呼ばれ、寛永二〇年(一六四三)より「天領南山御蔵入」となった。この地の幹線道路は南山通りと呼ばれ、若松城下から

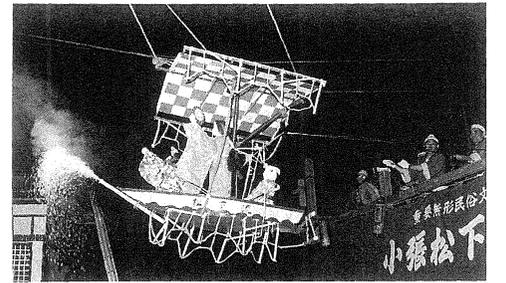
下野国今市宿に至る約三〇里の行程である。南山通りは、街道の行先の地名名により下野街道、日光街道、会津西街道とも呼ばれた。
大内宿は、散在していた古内、宮内、糠塚、坂本、山本諸村を合併してつくられた宿場町で、南山通りの主要宿駅の一つとして、江戸時代初期には参勤交代の往還の休息地として用いられた。大内宿には、問屋本陣、脇本陣が置かれていたが、本格的な宿場ではなく、半駅半農の馬継ぎ宿であった。
現在の大内宿に入ると、街道の両側に四五棟の主屋(うち三六棟が伝統的建造物)が軒を並べている。宿場の特徴は主屋が街道に面して妻面を見せて立ち並ぶことである。各主屋は、南北に延びる街道から約五メートルほど奥に後退させ、かつ敷地の北側に寄せて建てられており、南は余地をおいて奥の土間入口への通路とする。敷地の間口は六〜七間で、建物前面の壁面が揃い整然とした家並みは、大内宿の大きな特色となっている。主屋の多くは、江戸時代から明治にかけて建築され、平入りの寄棟造、あるいはこの妻を半分切り上げた茅葺の建物で、表側に並ぶ二室を座敷とし半間幅の縁側を設

ご存じですか？ こんな文化財①⑦

(茨城県)

重要無形民俗文化財

伊奈町の「綱火」 鹿島神宮「直刀」



小張松下流の「舟遊山」

指定の葛城流綱火の三つがある。

「綱火」は仕掛け花火を照明にして行われるからくり人形劇で、野趣豊かで、しかも幻想的な美しさがある。

伊奈町の小張松下流と高岡流は、「綱火」として昭和五十一年（一九七六）に国の指定を受け、それぞれが保存会を組織して、その伝承と保存に努めている。

伊奈町は茨城県の南西部、筑波郡の南端に位置し、町の西部から南部に流れる小貝川左岸には、治水事業の整備による水田が広がっており、北部から東部にかけて標高二十五メートル前後の筑波台地となっており、畑地や平地林が多く、起伏を利用したゴルフ場も見られる。

こうした自然環境のもと、伊奈町は古くから農業を基幹産業として発展してきたが、東京から五十キロメートルと通勤圏内にあり、また、筑波研究学園都市建設等の影響を受けて、住宅団地や工業団地等の造成が盛んになり、都市化が進展している。

小張松下流と高岡流綱火の起こり
伊奈町の小張と高岡地区に伝承・保存されている伝統芸能「綱火」は、小張松下流と高岡流とがある。前者は八月二十四日に小張地区の愛宕神社の祭りに、火難除けと豊作を祈願して奉納され、また、後者は八月二十三日に高岡地区に鎮座する愛宕神社の祭りに火難、五穀豊穡と村内安全を祈願して奉納され、この行事を中止すれば村内に必ず災難が発生すると言い伝えられている。

小張松下流綱火は永祿年間（一五五八〜一五七〇）に小張城主松下重綱公が戦勝祝いに考案し、陣中で演じたのがはじまりとされ、「三本綱からくり花火」ともいわれる。

また、高岡流綱火は「三本綱」とか「おはやし付操り人形仕掛け花火」とも呼ばれ、言い伝えによると、慶長十八年（一六一三）の三月二十九日の祭礼当日、愛宕神社前の大樹より赤蜘蛛と黒蜘蛛が舞い降り、この蜘蛛が巣を作るのを見て「神の使いの蜘蛛」と信じ、これに暗示を得て考案されたといわれており、地区の長男だけにその技法が伝授されてきた。演技方法と主な芸題（出しもの・外題）

「綱火」は大規模な空中のからくり人形芝居である。

高さ十数メートルの大きな柱を立て、大綱（親綱）と小綱（子綱）合わせて、数十本の綱



高岡流の「二六三番叟」と繰り込み風景

を張りめぐらし、対面にかけた檣の上から大綱に沿って掛けられた人形を手綱で操作し、空中で人形の動作を離子と合致させるため、十数人の演技者が一体とならなければならぬ。

そして、人形本体もしくは道具や舞台上に仕掛け花火を取り付け、場面に応じた花火が一層演技を盛り上げる。

小張松下流での出しものは、「二六三番叟」・「安珍清姫日高川」・「桃太郎と鬼が島」・「舟遊山」・「敦盛の一の谷の場」・「景清の牢破り」・「清正虎退治」・「熊谷次郎直実」

などがある。

また、高岡流では「二六三番叟」・「花咲翁」・「浦島龍宮入り海辺の花園」・「霞ヶ浦に浮かぶ高岡丸の舟遊び」・「安珍清姫日高川の場」・「小野道風と蛙の場」などがある。

面綱火にみられる特徴

小張松下流と高岡流綱火にみられる特徴は、人形の綱の取付けとその操作と、花火を人形の所作に応じて点火させ、観客を魅了する効果をあげていることや、お離子が人形劇に魂を吹き込むかのような独特の階律に由来していることなどであろう。

また、火薬類取締法等が厳しくなかった当時は、花火や綱火の製造や火薬の調合等が地区の方々によって行われ、その技術は極秘事項として、地区内の長男にのみ伝承されてきたのである。

今日、「たてはな」や「横綱火」、「もろもろ花火」と呼ばれる花火については、独特の製造技術と火薬配合法が秘伝として秘密保持され、その他の花火については煙火師の製造に頼っている。

伊奈町の「綱火」も他の民俗芸能と同様に、長い年月のうちに幾多の困難もあり、滅亡の危機に陥った時期もあったことであろう。特に戦後の混乱期や昭和三十年代からの急激な高度経済成長に伴う社会構造の変化は、こ

うした郷土の民俗芸能を衰退に追いやった。特に後継者育成の問題は他の地区や他の民俗芸能の分野でも共通の問題である。幸い、ここ伊奈町では小学生をはじめとした後継者の育成が行われており、益々の発展を期待している。

〈鹿島神宮の国宝「直刀」〉

鹿島神宮の門前町鹿島

鹿島町は茨城県の東南部、鹿島郡の南寄りに位置し鹿島灘に面し、古くから鹿島神宮の門前町として発達をとり、今日に至っている。特に昭和三十年代後半には、国の総合開発計画のもと、工業整備特別地域の指定を受けて、大規模な工業開発が行われ、掘り込み式港湾の完成によって石油化学工業と鉄鋼業を中心とする鹿島臨海工業地帯が形成された。

また、鹿島町はこれまでは陸の孤島などと称された公共交通機関の未発達な地域であったが、鹿島開発に伴う交通網の整備によって、JR東日本鹿島線と鹿島臨海鉄道大洗鹿島線が開通して、首都圏や県都水戸市と短時間で結ばれるようになった。

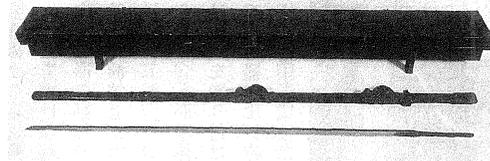
文化財の宝庫鹿島神宮

旧官幣大社で常陸国の一の宮である鹿島神宮は、建国の大功神としてあがめられる武甕槌大神を祭神として、その創立は皇紀元年と

いわれ、古代から現代まで最高の格式をもち、武徳の祖神としてあがめられ、また、安産・交通守護・殖産興業の神として、信仰を集めている。

社殿は六六五年頃から二十年ごとに建て替える式年造替の制度が長く続いたが、慶長十年（一六〇五）と元和四年（一六一八）に徳川家康・徳川秀忠によって壮麗な社殿が奉建されてからは、一定不動の社殿となった。

また、鹿島神宮が所蔵する文化財は国宝の「直刀」をはじめ、国の重要文化財に本殿・石の間・幣殿・拝殿・奥宮本殿・楼門・仮殿・



直刀、黒漆平文大刀拵、附刀唐櫃一合



直刀拵

梅竹時絵鞍があり、県指定の文化財も木造狛犬・黒漆燦銅時絵台・陶造狛犬・燈籠・太刀などのほか、約七〇ヘクターにも及ぶ神域は杉や松・シイ・モミなどの老木がうっそうと茂り、県指定の天然記念物でもある。

国宝「直刀」

鹿島神宮では、「直刀」を古くから「ふつのみたまの剣」と呼び、神宮の内陣深く秘められ、厚く崇敬されてきた神宝であり、昭和二十九年（一九五四）に研磨された。

「ふつのみたまの剣」は、祭神武甕槌大神の御神刀の名である。

「直刀」は昭和三十年（一九五五）、黒漆平文大刀拵、附刀唐櫃一合とともに国宝（工芸品）に指定されたのである。

「直刀」は長さが二三・四センチメートルで、反りが〇・五センチメートル、元身幅四・七センチメートル、先幅二・八センチメートル、茎長三二・九センチメートル、と身幅の広い長大な太刀で、普通の太刀の三振分程の長さがある。

姿はほとんど反りのない直刀で、また造込みは切刃造となっている。

鍛えは小板目肌がつむところと、大肌流れ

てやや肌立つところが入り交じり、総じて地沸突く。

刃文は元腰刃風となり、上は焼幅狭く、小のたれごころに浅く乱れ、ところどころ欠け出し、総じて小沸つき砂流しかかり、帽子はほとんど欠け出し、先に掃かけを見る。

茎は生ぶ、先刃上りの栗尻、平・棟にも樋目を見せ、目釘穴は一つで、作者銘は刻していない。

拵の金具は金銅製で、青金、緑、山形の足金物、石突の各部に瑞雲文の毛彫があり、青金、足金物、黄金・石突にそれぞれ宝相華唐草文透彫の長飾りを施し、山形金具の裏目には、帯執懸はぎの鍔をつけている。

柄と鞘は、黒漆地に平文で草原を疾駆する狻猊文を表したものであったが、現在、鍍金の大部分と平文全部が削げ落ちていることは惜しまれる。

刀身・拵とともに平安時代初期の制作といわれており、その長大な刀身は類例がない。

また、刀身の作者は無銘のため明らかではないが、「常陸国風土記」に慶雲元年（七〇四）に、佐備の大麻呂らが当社から程近い若松浜の砂鉄をもつて、刀を鍛えたとの記事があるのが興味深い。

（茨城県教育庁文化課 田上 顯）

ご存じですか？ こんな文化財②

(栃木県)

日光杉並木街道

特別史跡
特別天然記念物

足利学校跡

史跡

栃木県は、古代から独特の文化が芽生え古墳や役所・寺院跡などが県内各地に点在している。なかでも、特別史跡及び特別天然記念物日光杉並木街道と史跡足利学校跡は、その歴史と文化を顕著にあらわして貴重な文化財である。

日光杉並木街道

日光に向かう日光街道・例幣使街道・会津

これを回避することができた。

今日、地元の子供達や自治会による清掃活動や、所有者である日光東照宮、日光市・今市市、県など関係機関による様々な保護努力が続けられている。

足利学校跡

源姓足利氏の発祥の地として有名な足利市に、日本で最も貴重な数学研究施設跡の一つである、史跡足利学校跡がある。

足利学校の創設や創設者については定説が確立されておらず、奈良時代国学遺制説、小野篁説、足利義兼説などがある。この点については、今後の調査により歴史が明らかにすることが待たれる史跡である。

さて、この足利学校の名が表舞台に登場するのは、永享十一年(一四三九)、関東管領上杉憲実が学内規則を整え、施設の充実を力を入れ、円覚寺の僧快元を初代、席主として迎えたことによる。

特に天文十八年(一五四九)、ザビエルがインドのイエズス会にあてた書簡に「…坂東に大学有、日本國中最大で最も有名…」と報告したことにより海外にも知られることになったことは有名である。

当初、足利学校は漢学を中心とした教学施設であったが、戦国の世という時代のニーズから易学の研究により最盛期を迎えることと

西街道の三街道からなる日光杉並木街道は、総延長三十七キロメートルに及び、その両側には一万三千二百二十本の杉の巨木が天を摩して、亭々とそびえている。鬱蒼と繁り神秘性と壮大さを併せもつこれらの街道を歩くと、江戸時代の日光社大行列の面影が彷彿として偲ばれてくる。

この日光杉並木街道の誕生は、日光東照宮の造営に由来する。元和二年(一六一六)四月十七日、徳川家康が駿府城でその生涯を終えると、即夜、霊柩は駿府久能山の仮殿に遷座され、翌三年、朝廷から東照大権現の神号が勅賜された。同年、二代将軍秀忠は家康の遺命により霊柩を下野国日光山に移し社殿を造営した。

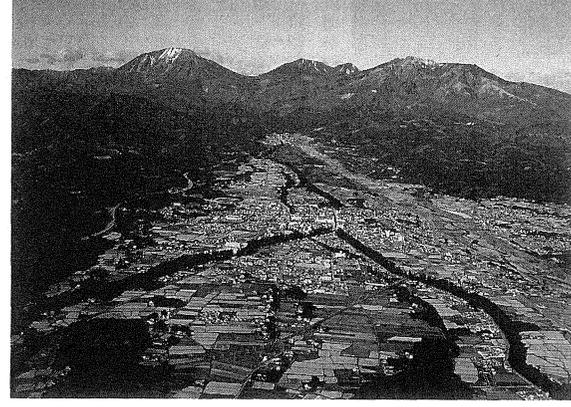
寛永十一年(一六三四)、三代将軍家光は巨費を投じてその造替えに着手し、同十三年、今日あるような日本近世建築の粹ともいえる豪奢にして荘厳・華麗な新社殿が完成した。

寛永二年(一六二五)、松平正綱は日光社参の道筋となる三街道に、杉苗の植栽を着手し、慶安元年(一六四八)、二十余年の歳月を経て完成させ、日光東照宮に寄進した。正綱はこの植栽を後世に伝えるため、石碑を建立しようとしたが、その完成を見ることなく死去した。正綱の死後、子の正信は父の志を継いで、並木の起点の四カ所に建碑した。すなわち、

なった。特に充実していたのは第七代席主九華と第九代席主三要の頃であった。

九華は、儒学・易学ともに異才を発揮し、北条氏の信望も厚かった。また、『学校由来記』には、「…而学徒凡有三千…」と記されており、その頃の隆盛をうかがい知ることができる。

校内に今も残る字隆松伝説も九華によるもの



日光杉並木街道全景

日光山入口の神橋(重要文化財)脇の親標と、日光街道大沢宿南、例幣使街道小倉村入口、会津西街道大桑宿東北端の各境標がこれである。神橋脇の親標には次のように記されている。

自下野国日光山菅橋、至同郡都賀郡小倉村・同国河内郡大沢村・同国同郡大桑村、歴二十餘年、植杉於路辺左右并山中十餘里、以奉寄進
東照宮、
慶安元年戊子四月十七日

從五位下 松平右衛門大夫源正綱

日光杉並木街道は、これら四基の並木寄進碑を含めて「特別史跡及び特別天然記念物日光杉並木街道 附並木寄進碑」として、我が国で唯一、特別史跡と特別天然記念物の二重指定を受けている。

その後、杉並木は日光奉行の管理下に置かれ、根際でのたきび禁止や下草刈、苗木の植足しなど保護策が取られてきた。明治維新の後、一時国有となったが、明治三十八年日光東照宮に返戻され、枯死木跡の補植などが行われてきた。

第二次世界大戦中の昭和十八年、杉並木は全伐の危機に直面した。国家総動員体制の下艦船用材名目の供木運動が大政翼賛会などから起こったが、内務省神祇院や文部省、さらには民間の有識者など多数の強い反対により、

のと伝えられている。

第九代三要は、徳川家康から絶大な信頼を得ていた。彼はその信頼により豊臣秀吉に没収されていた図書類を取り戻すとともに、家康の保護のもと、施設整備に力を注いだ。

このように発展してきた足利学校であったが、江戸時代中期には、度重なる火災や落雷等により経済的に破綻をきたしてきた。ま

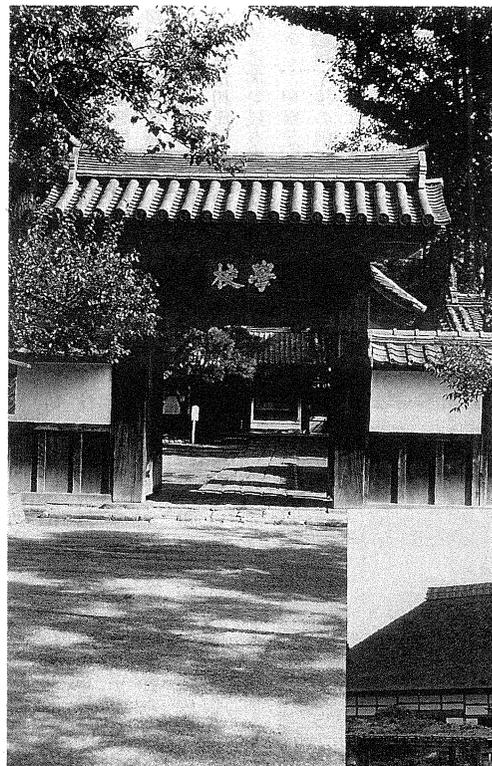


杉並木街道

〈利用案内〉
 栃木県足利市昌平町2338
 ☎0284-41-2655（足利学校管理事務所）
 JR両毛線足利駅から徒歩10分
 東武伊勢崎線足利駅から徒歩15分
 9：00～17：00（入場は16：30まで）なお、冬季は閉館
 時間が30分くり上げになりますので、あらかじめお問
 い合わせ下さい。

た、平穩な時代であつたため、易の必要性が失われるとともに、昌平齋や各地の藩校の隆盛から次第にその機能を失うこととなった。江戸時代末には、足利藩校求道館となり、明治時代の幕開けとともに実質的に廃校となった。しかし、その後の足

方丈と庫裏(復原)



足利学校校門



利学校跡には注目すべき特異な歴史があった。明治初期、画家として知られる田崎草雲を中心とした地元有志が、足利学校跡の荒廃を憂い、史跡保存運動を進めたことにより足利町管理のもとで、保存されることとなった。日本の文化財保存運動の先駆けであり、その後大正十年三月三日、元の史蹟名勝天然記念物保護法による最初の史跡指定の一つとなった。

また、明治六年には跡地が足利町立足利学校（後の市立東小学校）となったが、教育に対する状況、環境が変化しながらも、昭和五十六年まで教学施設として機能していた。

その後、足利市立東小学校は新築の必要性から、史跡を保存するため移転した。このため、足利学校跡は市民の強い要望により十年に及ぶ発掘調査、文献調査を経て、完全な姿で復原整備がなされた。

この事業により、足利学校跡は、歴史を学ぶ生涯学習の場として生まれ変わった。

足利学校跡はまた、史跡であるとともに、国宝・重要文化財九件を含む数多くの貴重な文献資料があり、その存在は日光杉並木街道とともに他に類例を見ない貴重な文化財であるといえる。

（栃木県教育委員会事務局文化課

主査 折原 昇・主事 高木時美）

群馬県



観音山古墳全景

重要文化財 史跡 観音山古墳 妙義神社



観音山古墳は、高崎市の東部、烏川の支流である井野川の右岸台地上に立地している。六世紀末の築造と考えられ、周辺には普賢寺裏古墳(五世紀前半)・不動山古墳(五世紀後半)・岩鼻二子山古墳(現在は原子力研究所。この古墳から検出された舟形石棺は、東京国立博物館の庭に展示されている)といった大型の前方後円墳や小型の円墳群が築かれている。

昭和四三年、群馬県教育委員会が発掘調査を実施した結果、主軸方位を北西に向け、墳丘は全長約九メートル、後円部径六一メートル、同高さ九・五メートル、前方部幅六三メートル、同高さ九・

史跡 観音山古墳

- 観音山古墳へはJR高崎線高崎駅から上信バス(原子力研究所行)で25分、「原子力研究所」下車徒歩10分。史跡公園は年中見学自由だが、石室の見学は往復1/2ガキにて申込みが必要。申込み及び問合せは下記へ。
群馬県教育委員会文化財保護課
〒371 前橋市大手町1-1-1
☎0272-23-1111(内4064)
- 妙義神社へはJR信越線松井田駅から車で10分。上信越自動車道松井田妙義ICから5分。宝物館が併設され、夏季にはイベント等もあり。問合せは下記へ。
妙義町観光協会 / ☎0274-73-2121

一メートルを計る二段築成の前方後円墳であることが判明した。墳丘からは葺石は検出されなかった。

墳丘の周囲には、馬蹄形を呈する二重の周堀が巡る。この外堀の外縁部を古墳の範囲と考えるならば、主軸全長は一八五メートルで、面積は約二万五千平方メートルほどである。

本古墳の特色を語る上で欠かせないのが、墳丘の墳頂部と中段平坦面から出土した埴輪群である。特に、形象埴輪の配列状況は、古墳時代の葬送儀礼の一端を具現するものとして全国的にも注目を集めている。

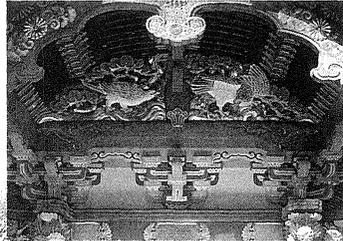
後円部墳頂部からは家、鶏、盾などが、中段平坦面の横穴式石室入り口部前面の西側くびれ部寄りからは魂、巫女、三人童女、靱負(ひきお)武人、御食持(みけもち)女人が、さらにその一群の北側からは正装貴人、挂甲(けがし)武人、農夫が検出された。また、前方部平坦面の西側から前面にかけて盾持男子、盾、飾馬、馬飼(うまかひ)男子、鷹匠(たかぢ)が原位置をとりだてて出土した。

埋葬施設は、後円部に位置し、南西に開口する両袖型の横穴式石室である。石室の規模は全長一二・五メートル、女室長八・二メートル、同幅は奥壁部で三・

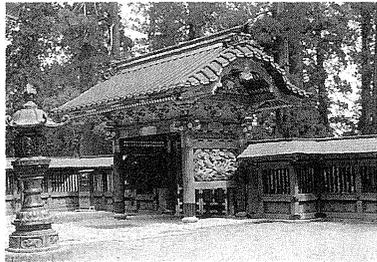
群馬県



彫刻彩色で有名な妙義神社本殿・幣殿・拝殿



唐門南妻の細部



妙義神社唐門

作の立派なもので、県指定の重要文化財である。

社伝によると神社の創立は宣化天皇二年で、日本武尊(主神)ほかを祀っている。山岳信仰の場として栄え、かつては波己曾神と呼ばれていた。波己曾とは岩社という意味であるという。文字どおり岩に接して建てられた神社である。

明治初年の神仏分離までは、神仏習合の神社であった。別当の石塔寺が寛永四年(一六三三)に上野寛永寺の本末となり、江戸時代中期には現在みられる境内がほぼ完成したとみられる。神仏分離に際して石塔寺は廃寺となった。

急な石段を登りきると建物が姿を現す。下から見上げるとやや傾斜があるように感じる。そこであきらめて帰ってしまふ参詣者もあるが、石段の周辺の杉やすばらしい景色をゆっくり眺めながら、ぜひとも参拝してほしい。黒を基調にした建物を前にすると厳かな気持ちになる。

本殿・幣殿・拝殿は、宝曆六年(一七五六)の建立。日光東照宮等にもみられる「権現造」の形式をもつ建物で、ともに銅瓦葺、黒漆を基調に細部に極彩色を用いた華やかな意匠に特徴がある。各所に用いられた精緻な彫刻にもみるべきもの

がある。

本殿は折上格天井で菊花の極彩色がなされ、壁板には波を彫刻している。本殿の彫刻のモチーフとして「水」が選択されており、水神信仰との関係が注目される。本殿と拝殿をつなぐ幣殿は格天井で百草が描かれ、拝殿は正面に千鳥の破風をつける。これらの建物の装飾題材は同時代の社殿に比べて仏教的な要素が少なく、自然界に題材を求めている点に特色がある。唐門も小規模ではあるが装飾が駆使されている。

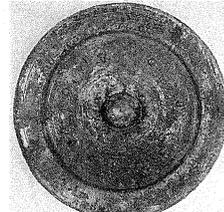
妙義神社では昭和六〇年度から四年計画で「昭和の大修理」を実施した。修理の内容は本殿・幣殿・拝殿・神饌所・総門(一七七三年建立)が塗装および部分修理、透塀(本殿と幣殿を囲む。延長は二八間・唐門は屋根の葺替えおよび塗装修理であった。この大修理で江戸時代建立時の荘厳さがひととき鮮やかによみがえった。

周辺には町立ふるさと美術館やアンデルセン牧場、妙義山ハイキングコースなどもあり、家族連れやグループでも楽しめる。また、少し足を延ばせば重要文化財に指定された碓氷峠鉄道施設も見学できる。

(同主幹兼専門員 高橋順一)



金銅製古葉



獣帯鏡



県立博物館に展示される観音山古墳出土の埴輪群

八メートル、羨道部寄りで三・一メートル、同高さは約三・五メートル前後、羨道部長約四・五メートル、同幅は玄室寄りで二・四メートル、入り口部で一・三メートル、同高さは約一・二メートル前後である。この規模は、現在、県下で知られている横穴式石室では最大規模を誇る。石室の壁面に使用されている石材は、羨道部入り口部寄りの半分が川原石、その他はすべて榛名山二ツ岳噴出の角閃石安

山岩の切石である。玄室の壁面は、五面加工した人頭大の角閃石安山岩を互目積みし、随所に切り組みの手法を取り入れる。また、天井石には羨道部、玄室部ともに巨大な砂岩の自然石が用いられている。

副葬品は、盗掘をまぬがれていたためにはほぼ原位置を保った状態で検出された。玄室の奥壁から三メートルのところに自然石を用いた間仕切り石があり、この空間の中心部からは、棺の飾り金具と思われる金銅製半球形金具類と棺を被覆していたとされる布片が残存していた。

また、西側壁寄りには、異形冑、掛甲、鉞、鹿角製刀子などの武器・武具類や金銅製鐙、金銅製花弁付雲珠、仿製神獸鏡、ハマグリ、櫛などが置かれていた。さらに、東側壁寄りには、獣帯鏡、金銅製鈴付大帯、銀製刀子、銀製鍍金空玉、金環、ガラス小玉が置かれ、人骨片や桃の実も検出された。間仕切り石前面の西側壁寄りからは歩揺付雲珠・環鈴・杏葉などの馬具類が、東側壁寄りから土師器・須恵器類と金銅製水瓶が発見された。これら副葬品は、そのすぐれた内容から昭和五七年に国の重要文化財に指定された。

観音山古墳の被葬者は上毛野地方の有

力豪族が想定され、当時、上毛野地方と大陸や朝鮮半島との間には、積極的な交流がなされていたことが、その副葬品から推定されている。

古墳は、現在、復元整備され史跡公園として一般公開されている。古墳の南一キロメートルにある群馬県立歴史博物館(番〇二七三―四六一五二二)には本古墳の出土品が展示されている。

(群馬県教育委員会文化財保護課 指導主事 三浦茂二郎)

〈重要文化財 妙義神社〉
妙義神社は、上毛三山(赤城山、榛名山、妙義山)の一つである妙義山の東山麓に位置し、標高四五〇〜五五〇メートルのところにある。上信越自動車道が開通した現在では、松井田妙義インターを降りて数分の距離にある。

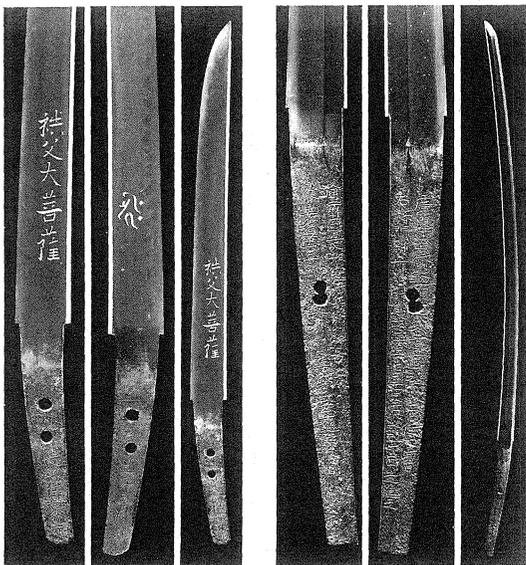
本殿・幣殿・拝殿・唐門ほか江戸時代中期から後期の代表的な社寺建築として、昭和五六年六月に重要文化財に指定された(昭和三四年に県指定の重要文化財に指定されている)。これら建造物と保存状況の良い石垣や豊かな自然環境によって、境内にはすぐれた歴史的風致が形成されている。石垣は巨石を使用した造

埼玉県

国宝 太刀

国宝 短刀

重要無形 民俗文化財 驚宮催馬楽神楽



(右) 国宝太刀
表銘 廣峯山御銀願主武藏国秩父郡住大河原左衛門尉丹治時基於播磨国完栗郡三方西造進之
裏銘 備前国長船住左兵衛尉景光作者進士三郎景政 嘉暦二年己巳七月日

(左) 国宝短刀
表銘 備州長船住景光
裏銘 元亨三年三月日
刀身表に「秩父大菩薩」、裏に梵字が刻まれている。

▽ 国宝・太刀／短刀

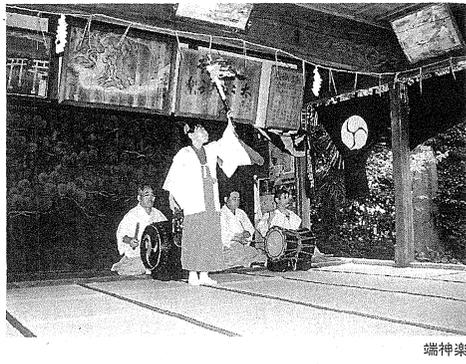
埼玉県西部、都心から六五キロメートル圏内の外秩父山地に囲まれた現在の都幾川村・小川町・東秩父村のあたりは、かつて大河原郷と呼ばれる武蔵武士大河原氏の故郷であった。

武蔵武士とは、古代末期から中世にかけて活躍した武蔵国の武士の総称であり、特に坂東八平氏や武蔵七党（武蔵国は現在の埼玉県・東京都及び神奈川県の一部からなるが、西党を除けば七党のほとんどは現埼玉県域の武士団であった。）など、同族的結合を基にした戦闘集団である「党」などを組織したところに特徴があり、鎌倉幕府成立の原動力となった。

●太刀、短刀が収蔵・公開されている埼玉県立博物館へは、JR大宮駅から東武野田線で大宮公園駅下車、徒歩5分。(9:00~16:30、休館日は月曜日・祝日を除く第4金曜日・日曜日を除く祝日の翌日・年末年始) 詳しい問合せは下記へ。
☎048-645-8171

●驚宮催馬楽神楽が行われる驚宮神社へは東武伊勢崎線驚宮駅より徒歩10分。公開日は1/1、2/14、4/10、7/31、10/10、12月初旬日。詳しい問合せは下記へ。
驚宮町教育委員会
☎0480-58-1111

埼玉県



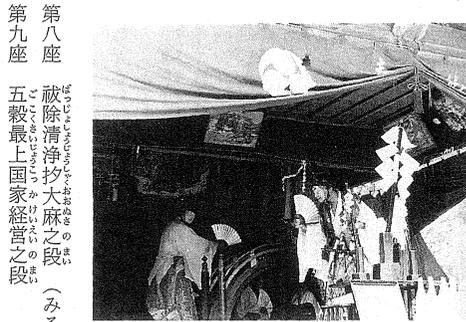
端神楽



遠く離れた故郷をしのんで、大河原氏が短刀を奉納した秩父神社(秩父市)

曲目は従来三十六座あったといわれているが、現在は十二座形式で次のとおり行われている。

- 第一座 天照国照太祝詞神詠之段(神詠)
- 第二座 天心一貫本末神楽歌催馬楽之段(種)
- 第三座 浦安四方之国固之段(国固め)
- 第四座 降臨御先猿田彦鉦女之段(猿田彦)
- 第五座 磐戸照開諸神大喜之段(磐戸)
- 第六座 八州起源浮橋事之段(浮橋)
- 第七座 大道神宝三種神器事之段(三種神器)



浮橋

- 第八座 祓除清浄抄大麻之段(みそぎ)
- 第九座 五穀最上国家経営之段(種時き)
- 第十座 翁三神舞楽之段(翁三神)
- 第十一座 鎮悪神発弓鞆負之段(鎮悪神)
- 第十二座 天神地祇感応納受之段(感応)

外 天津国津狐之舞(天狐)
 番外 太刀折紙之舞(折紙)
 端神楽 端神楽(端神楽)
 これらの曲目の大半は「古事記」や「日本書紀」に出てくる神話を題材にしている。
 舞の構成は、「出端」「序の舞」「舞掛り」「本舞」「引込み」「終わりの舞」の

「いくさは又おやもうたれよ、子もうたれよ、死ねばのりこえくたゝかふ」(平家物語)といわれた東国の武士の中でも、武蔵の武士団はとりわけ源平合戦、奥州合戦、承久の乱と続く戦乱の中で活躍し、その名を全国に轟かせた。彼らのうちには、こうした合戦の勲功として、反鎌倉幕府派の地頭職を与えられるものもあり、特に承久の乱以降は新補地頭として西國の地を中心に、一族郎党ともども移住していくものも数多く、郷土埼玉の長い歴史の中でもひととき光る発展の時代であった。

大河原氏は、武蔵七党のうちの丹党に属する中村氏(秩父郡を基盤)の一族であるが、彼らの分流もやがて播磨國に地

頭職を得て現地に移り住んでいくが、鎌倉時代末期になると遠く故郷をしのんで三振の刀剣を作っている。しかも、当代を代表する名工備前長船派の景光とその一門景政が製作に当たっており、正中二年(一二三五)銘の太刀(御物)・元亨三年(一二三三)銘の短刀(国宝)を故郷の秩父神社に(御物太刀には、願主大河原藏運・時基が三方西に於いて、長船景光・景政に作らせたことが銘文に刻まれているほか、刀身に「秩父大菩薩」の文字及び梵字が彫られている。もう一つの嘉暦四年(一二三二)銘の太刀(国宝)を移住先の廣峯神社に奉納している。武蔵に居住し続けた武士の多くが、南北朝争乱や室町戦国期の変転の中で没落・衰亡していったため、武蔵武士の華やかな歴史を物語る資料は数少ない。その中であって、大河原氏ゆかりの三振の刀剣は、優れた美術工芸品として重要であるばかりでなく、歴史資料としても貴重なものである。

このように本来神社に奉納されたものが、どのような理由で、いつ流出したのかそれ自体興味のあるところであるが、国宝太刀は江戸時代に幕府から宇都宮城主奥平氏に下賜され、短刀はそれより早く、戦国時代には既に上杉謙信の手にあ

り、「謙信景光」と呼ばれる愛刀であった。この太刀と短刀を、回り回って先年埼玉県が購入し、現在埼玉県立博物館において収蔵、公開している。二振の素晴らしい刀剣に秘められた武蔵武士の栄光の歴史を今見て取ることが出来る。

(埼玉県教育局文化財保護課 有形文化財係係長 岸 清俊)

▽重要無形民俗文化財 鷲宮催馬楽神楽
 関東平野のほぼ中央、埼玉県北東部の鷲宮町に鎮座する鷲宮神社は、古くは「土師の宮」と称していた。ちょうどこの辺りがむかし土師部(素焼きの土器等を製作する人々)が移住した地と伝えられ、社伝にはハジがなまってワシになり、「鷲宮」となったとある。この神社で行われる重要無形民俗文化財「鷲宮催馬楽神楽」は、江戸の里神楽の源流といわれている。正しくは「土師一流催馬楽神楽」と呼ばれるが、これはさきの「土師の宮」に「鷲宮」と関連している。

この神楽は鎌倉時代の書物、「吾妻鏡」に紹介されているが、正確な起源については定かでない。「催馬楽」とは、平安時代に流行した歌謡のひとつで、この神楽は各曲目ごとに催馬楽を取り込んで歌う点に特色がある。

三部分からなり、催馬楽・神楽歌は「出端」と「舞掛り」の間に行われる。

この神楽には、江戸の里神楽の持つ演劇風の構成がない。舞は二人で舞う連れ舞が多く、古い祭りの儀式や作法をしのばせる上品な美しさが見どころである。

この神楽は、一社相伝の社伝神楽とされ、神楽役は従来世襲であり、神社から知行(田畑三反歩)を与えられていた。しかし、昭和二〇年ごろから衰退が始まり、伝承者が白石国蔵氏だけになってしまった。ちょうどそのころ、NHKのラジオで「浮橋」と「鎮悪神」が放送された。これを機に若者十数人が集まり、白石氏の指導のもと、猛特訓によって十二座の一部を公開できるようになった。現在は氏子を中心に「鷲宮催馬楽神楽保存会」が結成され神楽の存続に努めている。

なお、神楽が行われる期日は一月一日(歳旦祭)・二月一日(年越祭)・四月一日(春季祭)・七月三十一日(夏越祭)・一〇月一日(秋季祭)・十二月初四日(大西祭)であるが、町の行事や依頼によって他地域でも公開する。

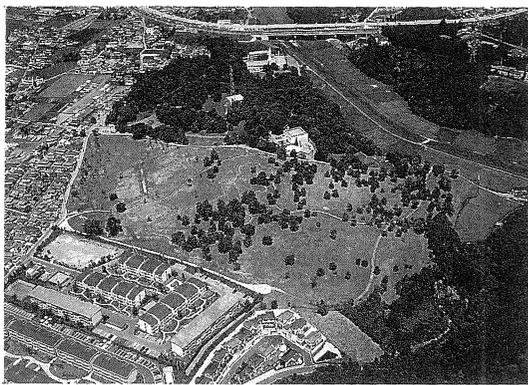
(同課民俗文化財記念物係主査 柳 正博)

ご存じですか? こんな文化財⑧

(千葉県)

史跡 加曾利貝塚
重要文化財 伊能忠敬遺書並遺品

〔史跡 加曾利貝塚〕
千葉県は東と南に太平洋、西に東京湾と三方を海に囲まれた地勢であり、房総に住む人々は古来から海と密接な関係をもつて生活してきた。重要有形民俗文化財「房総半島の漁撈用具」、特別天然記念物「鯛の浦のタイ生息地」、天然記念物「大東海浜植物群落」などの文化財が残され、各地に海との係わりを示す民俗芸能や習俗が伝えられているのも、そ



加曾利貝塚全景

の間の事情を物語るものであろう。海との係わりを語るうえで欠くことのできないものが貝塚である。千葉県には全国の貝塚の約二割に当たる、約五百五十カ所の貝塚が所在している。しかも、直径百メートルを越して環状にめぐる大型の貝塚が約三割を占める、まさに日本一の貝塚密集地域である。加曾利貝塚は千葉市で東京湾に注ぐ都川の支流、標高約三十メートルの台地上に位置する。直径百三十メートルの環状をなす北貝塚と、直径百七十メートルの馬蹄形をなす南貝

塚が南北に相接して、8字形という特異な形態を呈し、日本最大の貝塚を形成している。古くからの調査によって、縄文時代の全期間にわたって集落が形成されていたことが分かっているが、縄文時代中期及び後期の指標となっている「加曾利E式土器」「加曾利B式土器」の標識遺跡として知られている。貝塚の貝層はハマグリ・アサリ・サルボウなどの海産の貝が主体となって形成されている。出土遺物には、各種土器、石器、土偶や耳飾り、釣針・モリなどの骨角器、貝輪・貝刃といった貝製品、クジラ・マダイなどの魚骨、イノシシ・シカなどの獣骨のほか埋葬人骨も出土している。これらの出土遺物は、北貝塚内に建てられた千葉市立加曾利貝塚博物館に収蔵・展示されている。

この博物館は史跡から発掘された遺物の展示に留まらず、史跡地を含めた展示、すなわち野外も博物館展示の一部と方向付けており、貝塚内で消費された膨大な貝の量を実感できる「貝層断面観覧施設」や何世代にもわたる人々の住まいの移り変わりがよくわかるように設定された「竪穴住居跡観覧施設」が二年以上前に設置され、ユニークな野外博物館として知られている。また、全国に先駆けて実施された「縄文土器作り」も二十年以上の実績を有している。

〔千葉市立加曾利貝塚博物館〕
千葉市若葉区桜木町63 ☎043-231-0129
JR総武線千葉駅から千城台車庫行バス
桜木町停留所下車徒歩15分、貝塚公園内
月曜・祝日は休館、9:00~16:30(入館は16:00まで)



復元された縄文のムラ



住居跡群観覧施設

さらに、加曾利貝塚だけではなく、対岸の台地上に所在する滑橋貝塚や古山遺跡、及びその間に位置する谷津を含めて、縄文時代の地形・植生などを再現する「縄文の森」構想が策定されている。その一環として、平成五年度までに、加曾利南貝塚に新たな手法による貝層断面保護観覧施設や復元住居で再現した縄文集落が建設され、植栽も復元された。このように加曾利貝塚は、海との係わりだけでなく文化を育んできた千葉県にとって貴重な遺産であり、近年叫ばれている史跡の積極的な活用の実践例として、是非多くの人々に訪れてほしい史跡である。

〔千葉県文化財主事 上野純司〕

〔伊能忠敬遺書並遺品〕

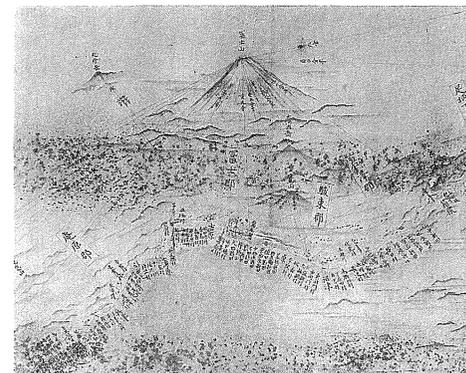
伊能忠敬は、江戸時代房総が生んだ世界的な地理学者で、その業績と人生は誠に希有なものである。延享二年(一七四五)上総国山武郡小関村に生まれた忠敬は、宝暦十二年(一七六二)十八歳の時に、当時利根川の河川交通の拠点として栄えていた佐原の商家に婿養子となり、以後五十歳で家督を譲るまで伊能家の家業復興に尽力した。

その後の忠敬は、天文方暦局の高橋至時に弟子入りし、年齢を感じさせず、測量・天文・数学の諸学問を修めた。寛政十二年(一八〇

〇)年に蝦夷地南海岸・奥州街道を最初に、忠敬は測量の旅を開始したのである。享和元年(一八〇一)伊豆・陸奥間の本州東海岸、奥州街道の測量、翌二年出羽街道・陸奥・越後の日本海岸、越後街道、中山道の一部、同三年には駿河・尾張・越前・越後の日本海岸、佐渡島を測量した。忠敬は、測量の旅では詳細な日誌を記し、旅程中から作図を行い、帰着するとそれらをまとめ、速やかに幕府へ上呈した。文化元年(一八〇四)には、それらの業績が認められ、天文方の手伝い職に登用された。これ以降測量・作図が幕府事業として認められ、全国の海岸線・街道や島嶼を歩き、正確で詳細な地図を作成したのである。

文政元年(一八一八)忠敬は七十四歳で亡くなるが、同四年忠敬の門弟らが忠敬の偉業を受け継ぎ、それらを集大成した『大日本沿海実測全図』(二二五葉、『大日本沿海実測全図』二二五葉、『大日本沿海実測録』十四巻を完成させた。これらの地図は、当時の水準としては極めて科学的で正確なものであった。忠敬の測量の特徴は、天体観測から一定地点の緯度を計測し、測定する二地点間の方位と距離を計り、また遠望する山頂・島嶼の方位を計りそこから線が一点に会うところに測定値を修正した点など正確を期したところとである。

〈伊能忠敬記念館〉
 佐原市佐原イ ☎0478-52-2340
 JR総武線佐原駅から香取神宮行バス
 新橋本停留所下車徒歩5分
 月曜休館、9：00～16：30（入館は16：00まで）



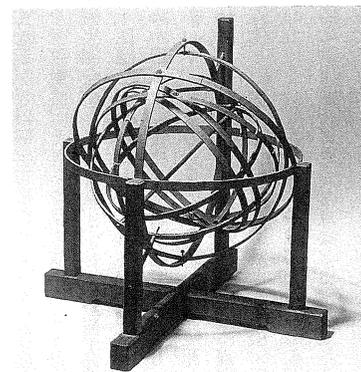
「大日本沿海実測全図」と測量日記

忠敬の成した偉業は、明治以降にも地図作成の基本とされ、正四位が贈られ、青少年のための読本の題材ともなった。また、地学者の間でも、忠敬を顕彰する記念碑が建設されるなど官民からその栄誉が讃えられた。

現在忠敬に関する文化財の指定には、山武郡九十九里町小関の県指定史跡「伊能忠敬出生地」（昭和四十四年一月十日）、佐原市内の国指定史跡「伊能忠敬旧宅」（同五年四月二十五日）がある。また、「伊能忠敬遺書並遺品」八十五点が国指定重要文化財となっている。

この内訳は、著書二十三点、測量図二十八点、日記・書簡九点、遺品二十五点である。

著書には、測量の基礎となった天体関係の書や、山・島の方位の測定値を記したもので、日記・書簡類には、忠敬の手柄を偲ばせる測量の道中で認めた手紙や、細かに記載される測量日記類が含まれる。測量図の原図は幕府に上呈された後、国防に関わるとして秘蔵され明治政府に受け継がれるが、明治六年の皇居火災で焼失してしまう。そのため、同六年に伊能家にあった副本が政府に献上されるが関東大震災で再び回禄に帰ってしまった。指定されている地図は、模写され残った一部である。遺品は、測量に使用した象限儀・量程車などの諸道具である。写真の渾天儀は、天体の運行を示すもので、忠敬の孫忠誨



渾天儀

が作製したと伝えられている。

また以上の他に、伊能忠敬手摺本百十点、伊能忠誨遺書二十点が附けたりとして指定されている。手摺本は、師高橋至時が著した著作をはじめとする天文・暦学・地誌等の当時の科学書である。忠敬の孫忠誨も、忠敬に習い多くの科学書を書写し残している。

以上の忠敬に関する遺品は、現在千葉県佐原市内の伊能忠敬記念館に収蔵・展示されている。記念館は、先述の「伊能忠敬旧宅」の隣に位置しており、利根川にそそぐ小野川に面し、付近は江戸から明治にかけての当時の町並みをよく残している。

〔千葉県文化財主事 植野英夫〕

東京都

大泉水に浮かぶ蓬萊島と徳大寺石（小石川後樂園）



特別史跡
及び特別名勝
特別史跡
江戸城跡
小石川後樂園



●小石川後樂園へは、JR総武線水道橋駅・飯田橋駅から徒歩10分。または、地下鉄後楽園駅から徒歩5分。
●江戸城跡の各門へは、下記のとおり（すべて徒歩で、JR表記のないものは地下鉄）。
大手門/JR東海道線東京駅から10分。または大手町駅から5分。
外堀田門/桜田門駅から1分。
半蔵門/半蔵門駅から5分。
田安門・清水門/九段下駅から5分。
平河門/竹橋駅から5分。

〈特別史跡及び特別名勝 小石川後樂園〉
（なごき徳亭門（西門）から入ると、文京区

役所や東京ドームなどの現代建築物の圧倒感、都心の古庭園の将来に大きな問題を投げかけている。小石川後樂園は、小石川台の南端が神田川の低地へ連なる変化に富んだ地形を利用して作庭された江戸時代初期の廻遊式庭園である。

後樂園の歴史は、寛永六年（一六二九）徳川御三家の一つ、常陸水戸藩主徳川頼房が、三代将軍家光から小石川邸を拝領したことに始まる。頼房は小石川台地のうっそうとした樹林からなる自然地形を生かし、沼沢地であったところに神田上

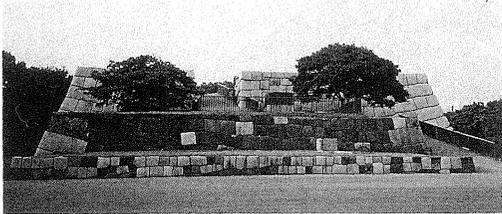
水を取り入れて大泉水を設けた。作庭は徳大寺左兵衛によるもので、その名は大泉水に浮かぶ蓬萊島南側の「徳大寺石」に残されている。徳大寺左兵衛の経歴は不明であるが、築庭には将軍家光の直接の関与があつたといわれていることから、家光の意図を理解し得た優秀な技術者であつたと思われる。

水戸家二代藩主光圀は儒学思想に基づく築庭を行い、亡命して来た明の儒学者朱舜水の意見を用いて中国の代表的な名勝地を庭園に取り込み、中国趣味を加味した景観を創出した。後樂園の名は朱舜水に選ばせたもので、君子は天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに遅れて楽しむ「先憂後楽」という宋の范文正の『岳陽樓記』中の語に基づくものである。

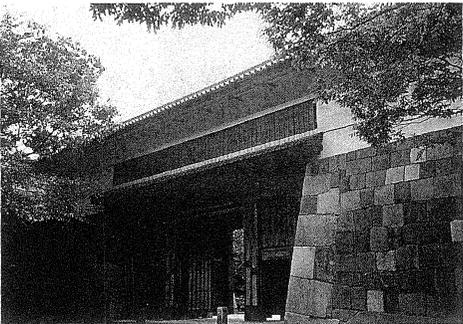
また、「円月橋」は朱舜水の設計に基づき駒橋嘉兵衛が作つたもので、八代将軍吉宗が江戸城吹上御庭に模作しようとしたが、石工に適任者がいなくて中止になったといわれている。円月橋とは橋下半月形で水に映って満月をなすことからこの名がある。安政の大地震や関東大震災など度重なる災害をくぐり抜けてきたが、高欄部分や目地に損傷が見られ部分補修

東京都

かつて五層の天守閣が建てられていた江戸城跡・本丸天守閣跡



寛永十三年（一六三六）築造の
旧江戸城田安門（重要文化財）

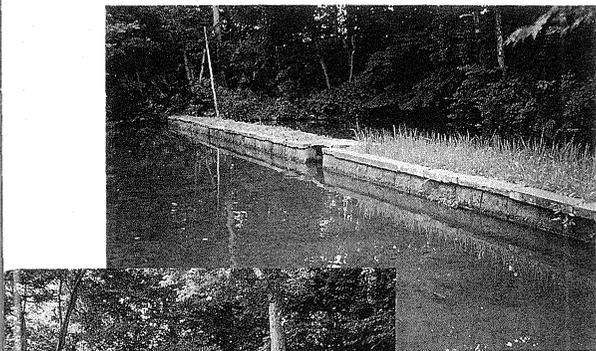


と引き継がれたが、大永四年（一五二四）小田原の北条氏綱が上杉朝興を破り、遠山直景を江戸城代として江戸城支配の基盤を固めた。上杉及び北条時代九六年間の江戸城は、支城または隠居城として使われただけで、道灌時代のような積極的意義をもつ城ではなかった。

天正一八年（一五九〇）小田原北条氏の滅亡により、徳川家康が江戸を領国経営の拠点と定めてから、江戸城の整備と城下町江戸の建設の準備が始められた。

現存する後楽園は、旧書院（現在のドーム球場付近）付属の小庭（内庭）と後庭（後楽園）とからなり、併せて小石川（昭和二〇年の戦災で焼失）を入れて棕櫚山を経て、大泉水を見ながら、時計廻りに巡遊する過程に廻遊式庭園の優れた構成美を認めることができる。

（1）蓬萊島を中心とする大泉水、（2）西湖から通天橋を結ぶ川の景、（3）清水観音堂から円月橋を結ぶ山中の景、（4）水田・稲田・松原などの田園の景、以上海・山・川・田の四つの構成要素を空間的にも見事な手法で組み合わせ集大成した総合庭園が小石川後楽園である。



園内西南部大堰川下流を走る切石橋の西湖堤



朱舜水の設計と伝えられる中国様式の円月橋

が必要となっている。

杭州西湖の堤を模した「西湖堤」は朱舜水の設計といわれているが確証はない。しかし、西湖堤の意匠はその後日本各地の大名庭園に生かされている。

江戸時代中期以降幾多の改変があったが、小石川邸全体は、明治四年（一八七二）土地・建物・庭石とも在来のまま六万両で兵部省が水戸家から購入し、同一二年には東京砲兵工廠が置かれた。この頃後楽園は湮滅の危機に遭遇したことがあった。富国強兵を押し進める兵部省の兵器工場拡張計画である。この後楽園廃止計画に陸軍卿山県有朋が反対した背景には、当時フ

あった。富国強兵を押し進める兵部省の兵器工場拡張計画である。この後楽園廃止計画に陸軍卿山県有朋が反対した背景には、当時フ

ランスから招聘されていたジュールジュ・ルボン大尉の進言が大きかったという。経済効率万能の風潮から、日本人による庭園の景観破壊が進む現状を思う時、将来を見通した先人の功績は正しく評価されねばならない。

現存する後楽園は、旧書院（現在のドーム球場付近）付属の小庭（内庭）と後庭（後楽園）とからなり、併せて小石川（昭和二〇年の戦災で焼失）を入れて棕櫚山を経て、大泉水を見ながら、時計廻りに巡遊する過程に廻遊式庭園の優れた構成美を認めることができる。

（1）蓬萊島を中心とする大泉水、（2）西湖から通天橋を結ぶ川の景、（3）清水観音堂から円月橋を結ぶ山中の景、（4）水田・稲田・松原などの田園の景、以上海・山・川・田の四つの構成要素を空間的にも見事な手法で組み合わせ集大成した総合庭園が小石川後楽園である。

〈特別史跡 江戸城跡〉

東京の表玄関東京駅から西側を見ると、丸内のオフィスビルの合間から緑の木立と石垣が意外に幅広く続いているのが望まれる。現在の皇居である。

江戸城の歴史は、今から約八〇〇年前

慶長八年（一六〇三）、家康が征夷大将軍に任ぜられてから、諸大名を動員した御

手伝普請によって近世江戸城の築城工事は進められ、天守閣は同一二年（一六〇七）に完成した。現在の天守台の位置よりも南側であった。

二代秀忠は元和八年（一六二二）現在の天守台のある位置に天守閣を造営した。江戸城整備は三代家光の代にほぼ完成する。寛永六年（一六二九）には石垣・城門・枳形を造営し、同一三年（一六三六）には外堀を完成し、同一四年（一六三七）には天守閣の造り換えに着手、翌一五年（一六三八）に完成した。しかし、一九年後の明暦三年（一六五七）の大火（振り袖火事）で焼失してしまった。現在見ることのできる天守台は、大火の翌年に損傷した石垣石を御影石に変えて築造されたものであり、再建されることなく今日に至っている。

なお天守閣については、「江戸城造営関係資料」（東京都立中央図書館所蔵）として重要文化財（美術工芸品・歴史資料の部）に指定されている。幕府作事方大棟梁申良家文書に設計図面が現存する。

家康の江戸入府以来、三代家光に至る約半世紀にわたる御手伝普請によって築かれた石垣や掘割の大部分は、当時の遺

の一二世紀の中頃、桓武平氏の流れをくむ江戸四郎重継が、現在の武蔵野台地の東端部に江戸館を築いたことに始まるといわれている。重継の長子太郎重長は源頼朝の御家人として豊島・荻原・多摩の三部を所領とした有力な豪族であったが、南北朝時代には衰退したらしい。

その後、康正二年から長祿元年（一四五六〜一五七七）にかけて、関東管領扇谷上杉氏の家宰太田道灌（資長）が、古河公方足利成氏との抗争に備えるために本格的な城郭を築いた。道灌築城の中世江戸城は、文明八年（一四七六）の『寄題江戸城静勝軒詩序』に「拾余丈」（約三〇メートル）の険しい崖の上に立ち、周囲に「巨溝浚鑿」（深い掘割）を廻らしたとあり、同一七年（一四八五）頃の『静勝軒銘詩並序』に「子城」「中城」「外城」の三郭から成ると記載されている。

「城高くして攀すべからず」といわれた関東屈指の堅城であった中世江戸城は、のちの江戸城の本丸・二の丸付近とする説もあるが、詳細は明らかではない。中世の江戸は、江戸湊を中心に海上輸送の要衝として繁栄した城下町であったと考えられる。

文明一八年（一四八六）の道灌暗殺後の江戸城は、扇谷上杉定正・朝良・朝興構を現代に伝えている。

江戸城は豪族の館から中世城郭を経て近世城郭へと極めて珍しい展開を遂げた城郭である。明治維新により徳川氏の手から離れて宮城となり、戦後皇居となって現在に至っている。江戸城内の殿舎は、江戸時代以来の度々の災害でそのほとんどを失っているが、富士見櫓・伏見櫓・巽櫓などは現存しており、寛永十三年（一六三六）の「旧江戸城田安門」、万治元年（一六五八）の「旧江戸城清水門」、寛文三年（一六六三）の「旧江戸城外核田門」の三件は重要文化財（建造物）に指定されている。明暦の大火以前に廻ることのできる建造物は田安門のみであり、現存する城門に高麗門・櫓門・堀からなる典型的な枳形構造を見ることが出来る。

江戸城関連では「江戸城外堀跡」と「常盤橋門跡」が史跡に指定されており、「江戸城跡のヒカリゴケ生育地」が天然記念物に指定されている。直接江戸城に関係するものではないが、北の丸の「旧近衛師団司令部庁舎」、桜田門外の「法務省旧本館」が重要文化財に指定されている。

（東京都教育庁生涯学習部文化課 学芸員 電田駿一）

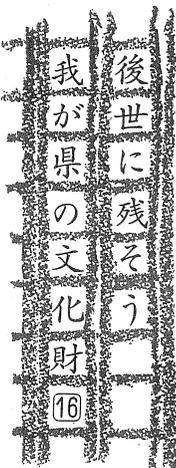
神奈川県



臨春閣全景

重要文化財

臨春閣



●臨春閣のある三溪園へは、JR横浜駅から市バス8・125系統で35分、「本牧三溪園前」下車、徒歩3分。またはJR根岸駅から市バス54・58・99・101・108系統で10分、「本牧」下車、徒歩7分。
公開は年に1～2回で、本年度は8月3日(土)～18日(日)。詳しい問合せは下記へ。
財三溪園保勝会 ☎045-621-0634・5

横浜市中区本牧三之谷に広さ一八万平方メートルに及ぶ日本庭園の三溪園がある。明治、大正時代生糸貿易商として活躍した原三溪翁が精魂傾けて造った庭園で、明治三九年に開園した。四季折々の自然の景観の中に、京都や鎌倉などから集めた歴史的建造物が地形に応じ巧みに配置されているところが特色で、現在国指定の重要文化財建造物が一二棟ある。これらの建物の中、とりわけ有名な数寄屋風書院造の臨春閣について紹介しよう。

この建物は、かつて豊臣秀吉が築いた聚楽第北殿の建物で、瀟洒な意匠から千利休によるものと伝えられていた。

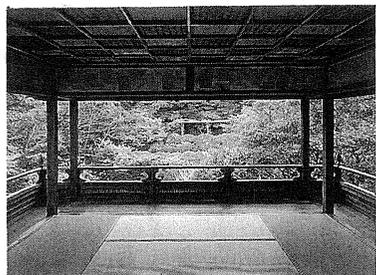
しかし、昭和二八年に三溪園が原家から財三溪園保勝会の手に移り、庭園及び建造物の修理工事をした際に、その監督をつとめた東京工業大学の故藤岡通夫博士(所属は当時)が調査を行った結果、臨春閣は当初、紀州徳川家の別荘「巖出御殿」として建てられたと推定されるにいたった。

巖出御殿は、紀州徳川家初代頼宣が慶安二年(一六四九)和歌山市の東方一二キロメートルにある岩出の紀の川沿いに建てた夏専用別荘である。当御殿は宝曆一四年(一七六四)、大坂泉佐野の豪商食左太郎に譲られ、春日出新田(現大阪府此花区)の別荘に移された。春日出別荘は巖出御殿の移築で一段と格好がつき、浪華二名園とたたえられた。なお、当御殿の二階から紀伊、大和、淡路など八州を望むことができたので八州軒と呼ばれるようになった。

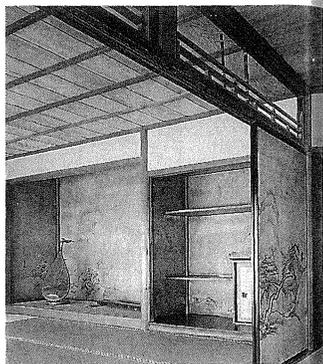
明治三九年に三溪園の外苑を開園し、これから内苑を造園するにあたり、その中心をなす格好の建物としてこの八州軒が三溪園の目にとまり、明治三九年、時

神奈川県

第二層は池に面し、池の上に張り出した廊下の天井は、茶室に見られる細丸太の柱と細竹の木舞を使った化粧屋根裏とし、廊下に面した部屋の間も茶室の連子窓に見られる細竹を使っている。このため大きな建物にしては重苦しさが全くなく、実に軽快な感じを受ける。



第三層二階村雨の間



第三層天楽の間

左右の絵の工法と図柄が異なることから当初は各々が全く別の所に使われていたことがわかる。難波の間と琴棋書画の間の間の難波十詠の欄間は、殿上人が詠んだ歌を記した額を菊の花と葉の彫刻で支えるかたちとなっている。

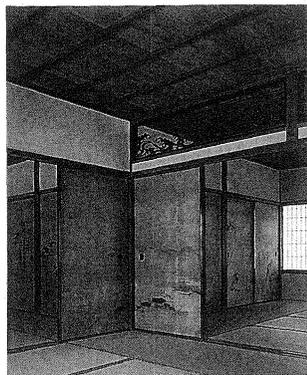
これまでの障壁画はすべて狩野派のものでしたが、次の間の絵は雪舟や雲谷系の山水画を得意とした雲澤等悦により山水が描かれている。次の間から二階へ昇る階段は、コの字型になって二つの角に広い踊り場を設け、また、巾も一九一センチメートルこの

その他、天井の竿縁の作り、建具の框の色、棧の組み方、縁板の打ち方等々第一層のものとは異なる程に数寄を凝らし飽きさせない。第三層は、二階建てとなっており、一階は、三部屋が並び第一、第二層と異なった間取りになっている。天楽の間の障壁画は、四季山水図で、狩野探幽の弟の安信筆である。第一、第二層とも画面を部屋名としたが、この部屋は欄間に雅楽器の笙、竽、高麗笛、龍笛を飾り天女が天楽を奏する様をあらわしていることから天楽の間と呼んでいる。このように楽器を欄間に飾つた例は他に全く全く独創的な意匠である。この部屋の床柱もごくありふれた杉丸太を使い、また柵も天袋の戸を省略するなどきわめて簡素ながらも、この部屋は紀州侯奥方の部屋だったので、床柱や欄間の楽器を支える唐様の高欄を朱塗としている。

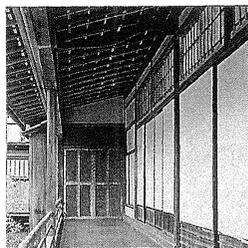
限られたページ数のため十分には紹介しきれなかったが、この魅力ある臨春閣の屋内見学希望者はきわめて多く、対応できない状況なので現在別記のとおり年間一〜二回公開日を設けている。是非この機会をご利用いただきたい。

(嗣三溪園保存会事業課長 川幡留司)

左に鶴の間、右に花鳥の間、波型の欄間が見える第一層瀟湘の間

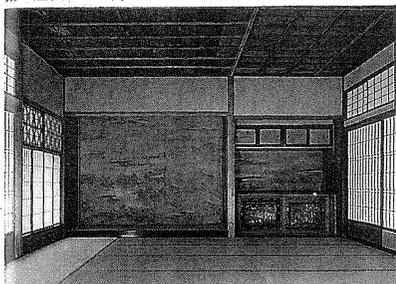


第二層廊下



P.26、27の写真撮影/岡本茂男氏

第二層住之江の間



の所有者清海復三郎氏から三溪翁の手に移った。手には入れたものの、園内のどの場所にも、また三つの建物をどのように配置したらよいかと検討を重ね一〇年余りかけようやく移築し、名称も臨春閣と改めた。臨春閣は、寛くため別荘なので荘重華麗な書院造の固苦しさは見られない。建物は、数寄屋の様

式をとり入れ瀟湘、軽快な意匠が各所に見られ、障壁画も書院造に見られる刺激の強い金碧濃彩画は避け淡彩もしくは水墨で描かれている。この臨春閣の全景を眺められる前庭に立つと、右側から第一層、第二層、第三層と三つの建物が雁行(雁が飛行する時の配置)している。ここで大阪春日出時代と大きく異なつた点をあげると、現在一番左にある第三層が、第一層の右側にあったこと、屋根の材料がかつては本瓦、一部平瓦葺だったのが現在は、母屋が檜皮葺、廂が柿葺となっていることなどである。さて、臨春閣を第一層から順に紹介しよう。第一層は、鶴の間、瀟湘の間、花鳥の間と台子の間という四つの部屋からなる田の字型の間取りで、部屋の名は、台子の間を除きいずれも障壁画の画題からとっている。鶴の間の鶴図は、狩野周信、瀟湘の間の瀟湘八景図は周信の父、常信が、花鳥の間の四季花鳥図は、常信の父親の兄にあたる探幽が描いている。第一層には、床の間や棚などの部屋飾りがなく簡素な中で、瀟湘の間と花鳥の間との間の波形の欄間のみが異彩を放っている。これは探幽の高弟桃田柳栄の下

絵を彫刻したものである。臨春閣には障壁画の描かれた部屋が七部屋あるが、近年退色、亀裂、剝落等が目立ち、放置できない状況だったので文化庁など関係各位の指導により、同じく三溪園内の月華殿の二室の障壁画と共にコロタイプ印刷を主に複製し、実物は三溪記念館において保存・展示することとした。第二層は、臨春閣の中心をなす建物で、住之江の間、難波の間、琴棋書画の間の三部屋が鍵型(「L」字型)に配されている。住之江の間の障壁画、住之江浜松図は伝狩野山楽筆、難波の間の難波戸雁図は伝永徳筆、琴棋書画の間の琴棋書画図は探幽によって描かれている。主室の住之江の間は、他の二室より一段高く、いわゆる上段の間で、部屋飾りとして床、棚と書院がある。床柱、落し掛に杉丸太を使い、書院も略式の平書院とするなど、軽快な数寄屋の様式を所々にとり入れている。平書院欄間の立湧模様の棧は、曲げたものでなく削り出した曲線で、大変珍しく京都島原の角屋の緞子の窓の意匠と共通した趣がある。棚の地袋戸は、桑材の框に中国明代作の黒漆地に螺鈿で樓閣人物を描いた板をはめ込んだもので、